
とある世界の剥離要素（エラーポイント）/外伝

観葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エラーポイント
とある世界の剥離要素／外伝

【Nコード】

N4236T

【作者名】

観葉

【あらすじ】

エラーポイント
とある世界の剥離要素の外伝。現在小豆の小学生時代を進行中。
／本編↓ <http://ncode.syosetu.com/n7645r/>

目の前に、婆さんがいる。気苦労の多い職業なのか、皺が段々目立ち始めてきた程度——精精四〇ほどだろう肌なのにも関わらず、婆さんの頭髮は真つ白だった。その割りに艶があり、まるで銀髪のようにも見えるあたり、婆さんが中々金持ちであるということが伺える。

婆さんは、まるでそれが自身の最愛の存在であるとも言つかのようにな満面に微笑をたたえて俺のことを見つめていた。この、人の良さを極めたような笑みを、俺は知っている……… ような気がする。が、思い出せない。まあ、すぐに思い出せない以上、あんまり重要な記憶でもないんだろうな。

それより、目の前の状況だ。一、俺の目の前にはめちやくちや善良そうなおばあさんがいる。二、そのおばあさんはめちやくちや幸せそうな笑みを浮かべながら俺を見つめている。

Q・この状況は何ですか？

A・夢に決まってるんだろこの田吾作が。

ですよねー。夢、そう、こんな状況夢に決まってるよな。何せ俺は、会社帰りにバスに乗って、忘年会のセッティングやらで疲れてたし最寄のバス停まではまだ遠かったから寝てしまおうそうしようという感じで眠ったのだ。

眠ったら、次の瞬間は意味不明な状況。まあ当然、夢だろう。そう納得すると、すうつと現在の状況に違和感を感じなくなり、急速に眠気が増してきた。夢の中で寝るって、また奇妙な夢だと思いつつ、俺は思考を手放す。

——あ、そういえばこの婆さん、確か……、

はッ！？ 此処は！？ しまった、バスの中なのに思いっきり寝ちまった！ 乗り過ごしたらバス料金が途轍もないことになる！ 今どのあたりだ——、

慌てながらも周囲を確認して現在位置を確認しようとした俺は、次の瞬間愕然とすることになった。

バスじゃ、ない。

どころか、車内ですらない。ゴトゴトという振動も感じられなければ、硬いシートにもたれているわけでもない。俺は、なにやら白いふかふかの布に包まれて何かのカプセルの中に入れられているような状態だった。透明なカプセルの向こう側には茶色系の高級そうなインテリアがあり、何やら富豪の家っぽい空気を醸し出しているが、同時にハイテクっぽい機械もあるので、多少趣味はおかしいもののおそらく病院か何かだろう。

当然、そんな状況に陥ることに心当たりはないし、目覚める直前

もそんな状況じゃなかったの、これは夢だと反射的に思ったのだが、にとしては感覚がリアルすぎた。とすると、これはまぎれもない現実ということになるのだが、

それじゃ一体、ここはどこだ――？

「おぼお、いいーあぶ、ばぶば？」

……声が出ない。何故か、喉の辺りが上手く動かなかった。いたい、どうなつてやがる？　なんだか近くから赤ん坊の声が聞こえたみたいだが、近くに赤ん坊がいるってことか？　うーむ、よく分からん。

「あらあら、小豆ちゃん。起こしてしまいましたか？」

頭を捻っていると、白髪で人のよさそうなお婆さんが俺の顔を覗き込んでいた。夢で見た婆さんだ。ということは、あの時点で既に夢じゃなかった……ということか？

っていつか小豆ちゃん？　何言つてんだ？　俺の名前はそんな女じみた……っていつかペットみたいな名前じゃない。まったく、やれやれだぜ。女の子と俺の顔を見間違えるとは。

「だあぶ、おおけてえんだあ」

大分、ボケてんだな……そう言った瞬間、赤ん坊も同じようなことを口走ったようだった。発音はたどたどしいが、間違いなく俺の思い浮かべた言葉と同じようなことを喋っている。

「あ！？」

俺は首を動かしてあたりを見渡そうと思ったが……こてん、と倒れたきり、首を持ち上げることもできなかった。え？ 麻酔でも効いてんの、俺の身体。もしかして、乗っていたバスが事故って、それで俺は今病院にいる、とか？ そういえばバスの中には小さい女の子もいたようだったからな……。その子を見舞いに来たってころだろう、この婆さんは。

「小豆ちゃん……？ 今、なんて……」

婆ちゃんは俺の方を怪訝な視線で見つめている。だから俺は小豆じゃないって。……もしかして、事故って大分酷かった……？ いや、その通りだろう。なんせ俺は首が動かないほどの重傷だ。

後遺症だって残るかもしれない……。そう考えたら、急に寒気が走ってきた。命が助かっただけでもよかった……。か？ もしかしたら、この婆さんの孫らしき女の子は亡くなっているのかもしれない。そのショックで錯乱していて、俺を女の子だと誤認しているとか……。

「小豆ちゃん、小豆ちゃん？」

カプセルのカバーが開き、婆さんが俺の身体に触れてきた。これは相当まずいぞ……。このままだと婆さんに縊り殺されるかもしれない。

「だああ、あじゆきいやなあっ」

だから、小豆じゃないって、と腕を払おうとしたとき、また赤ん坊の声が聞こえた。いや、最早赤ん坊というには呂律が回りすぎている言葉だった。

え？ 何ということ？ っていうかこんな偶然出来すぎてるよ

な？ 麻酔が効いてる割には身体感覚もあるし、そのくせ身体の痛みだつてまったく、そうまったくくない。

「小豆ちゃん、喋れるんですか……？」

俺、もしかして『小豆ちゃん』とやらになつてゐるってのか！！？

「まず、説明してもらいましょうか」

「……………」

不覚だった。ああ、一生の不覚といつても過言じゃないだろう。そりゃ、生後数時間でくっちゃべつてゐる赤ん坊見たら、それが誰だろうとビビるよな。

現にこの俺の目の前にいる見覚えのある婆さんも俺の事をものすごい警戒している。てればす？ で人格植え込まれただの、がくえんとし？ のあんぶ？ が自分の手綱を握ろうとしてゐるだの。

単語の意味が良く分からないんだが、俺から言わせてもらえばぜくんぶそんなこと知ったこっちゃない。ただ、話を聞くにこの婆さ

んは俺の今こうして思考している人格をまっさらにする方法を知っているらしい。

それは困る。ものすっごい困る。まだ状況が良く分からないが、こうして考えることができなくなるのは少なくとも困る。

で、さっきの「説明してもらいましょか」に戻るわけだ。俺は悟った。これは、見事に納得のいく説明がないと人格を消されちゃうな、と。

あと、改めて見回してみると此処は病院なんかじゃなかった。ベッドは俺の転がってるモノが一つあるだけだし、他は年代モノっぽい木机があったり高級そうな本棚があったり、茶色っぽい系統のインテリアが勢ぞろいしてたりと、どっかの社長の執務室を彷彿とさせる部屋だ。おそらく、この婆さんの私室か何かなんだろう。この婆さん凄いリッチっぽいし。

「……ええと、おれにも、よく、わかんないっていうか……」

やっと回り始めた呂律で弁明する俺を見る婆さんの視線は、冷たい。

この婆さん、やっぱりなんか見たことあるような気がするな……。なんだっけ。この柔和そうな笑みとか。記憶よりもちよつとばかり若い気がするけど、それでも総白髪なあたりとか、非常に記憶にあるような気がする。

って、そんな風なあいまいな考えしかできない時点で大分怪しい記憶なんだろうけどな。

「それじゃあ、仕方ありませんね。試作段階というのがネックです
が背に腹は代えられません。洗脳装置を……」

「ま、まとうぜ、ばあさん！ その『てすためんと』ってのがなに
か、よくわかんねーけどさ！」

『てすためんと』、って何だ？ と思いつつ、それはきつとたい
そうマズイモンなんだろうとあたりをつけて必死にとどめる。俺と
言う人格に対してすぐさま名前が出てくる辺り、どうせ人格を書き
換えるとかそんなトンデモシーンなんだろう。

どうやら俺を取り巻く環境は中々SFチックな世界観らしい。夢
……ではないだろう。感覚がリアルすぎる。となると、俺はこの赤
ん坊の体にとりついた？ ような状況だと思うのだが、この世界は
元いた世界よりも数十年ほど技術力が上がってるらしい。

「そりゃ、いまのおれ、そうとうきもいとおもうよ。あかんぼうの
くせになかみはおとななんだもの。でもさ、おれだつてわるぎがあ
るわけじゃないんだよ。きがついたらこーなつてたのさ。わかつて
くれよ。すくなくとも、そのぶつそうなのはやめてくれ」

「分かりません。僕かも知れませんが、私とて愛娘がやつと授かつ
た子供に余計な欠陥は加えたくありません」

人様の人格を欠陥呼ばわりかよ、大したお母様だな。ああもう、
なんでこうなるかな。まあ、この婆さんの「てすためんと」とやら
を使えば俺の状況も元に戻るかもしれないし、もう別にいいか。寝
て、目を覚ませばきつともうバスの中だ。

楽観的な考えかもしれないけど、こうでも考えないとやってられ
ないよな。この状況、打開のしようもないし。あー詰んだ詰んだ。

「じゃあもう、すきにしたらいいさ。でも、ちよつとはかんがえて
みてほしいね。おれがつくられたじんかくで、あんたにしかけられ
たわなだったとして、そのおれがどうしてこんなかんたんにぼろを
だしたのかとか」

ま、普通に考えて俺が無害だろうと人格はまっさらにして普通のガキとして育てるのが正解なわけで、こんな言葉に意味はない。ただ、この無慈悲な婆さんの今後の人生に少しでも影を与えようって言う、クズじみた悪あがきだ。自分でやって反吐が出る思いだが、どうせこの無慈悲な婆さんはなんとも思わないだろう。

「……………確かに、そうですね」

突然の肯定に俺が何かを思う前に、

「『転生』、あなたはこんな言葉を聞いた事があるでしょうか？」

「え」と反応を示す間もなく、婆さんはさらに続ける。

「勿論、私とて科学の街の住人。そのような非科学的な現象を信じているわけではありません。しかし、この街は超能力さえ科学の力で証明してしまった。ならば、いわゆる霊的な現象も同じように証明できるかもしれない。現に、あなたは実際に前世の記憶を所持したまま生まれています。それにそもそも、あなたは出生後まもなく他の勢力の毒牙に犯されないよう私の私室に運んできたのです。精神感應能力者が入る隙もないはずです。あくまで『はず』であり、あなたをこのような状況に陥れた犯人の存在がいないと決まったわけではありませんが」

婆さんのいつてる言葉の意味は半分も理解できなかったが、要するに俺が『転生』して、この体として生まれたということらしい。そして、婆さんは（あくまで暫定的にだろうが）それを信じる、というのだ。馬鹿じゃないの？と思う。

さっきは無慈悲な婆さんとか言ったが、あの状況で俺の言葉を信

じないのは当然だ。いきなり赤ん坊が喋ればなんかとりついたと思うし。それをこの婆さんは、俺の苦し紛れの恨み言を聞いただけで考えを一八〇度翻してしまったのだ。これはもう馬鹿とかそういう次元じゃない。

善人。

小さいア行と「ん」がカタカナになる某白い人が随分と固執していたワードだったなあ、などと思いつつ、目の前の人のよさそうな（十中八九俺のイメージの影響を受けている）婆さんを表現するワードとしては、これほど適切なものはないと思う。

「えっと、もしかして、しんじてくれる、……の？」

「当然でしょう。私は孫娘の言葉を信用しないほど、人間が嫌いな訳でもありません」

そう言つて、婆さんは俺の頭を撫で、見るもの全てを安心させるような微笑を俺に向けた。安心からか、俺の体からどんどん力が抜けていく。なんか色々ツツコミどころがあるような気がするが、今はとりあえず、いいや……。

目が覚めたら、知らない天井だった。

いや、知ってる天井だ。うん。最後に目を覚ましたときに見た天井だ。ただ、『前』は見たことのない天井だった。俺は周囲を見渡し、誰もいないことを確認してからボソリと呟いた。

「……知らないでんじょうだ」

やっぱり、仮にも『転生』ならこの台詞は王道だよな。

というわけで現状確認なのだが、この状況。前世（俺に死んだ記憶はないのだが、暫定的にそう呼ぶ）で読んだ『転生モノ』というジャンルのweb小説のシチュエーションにそっくりじゃないだろうか？ っていうか、まんまだと思う。

となると、セオリーどおりならここはどっかの漫画の世界とか……という話になるんだろうが、そこまで考えて俺は自分の考えに苦笑する。

『んなわけねーじゃん、夢見るのも大概にしようぜ！』

だってそうだろう。百歩譲って『転生』なる現象が科学でも証明できる自然現象だったとして、世界を超えとかマジ有り得ん。仏教徒でもなければ十字教徒でもない俺に、神のいたずらとか信じろって言うほうが無理あるし。

おそらく、ここは現実世界。記憶や人格を改ざんできる技術が一般化しているあたり、俺が暮らしていた時代より数十年から一〇〇年近く文明が進化し、逆に倫理は衰退しているみたいだが。

となると、俺の生前の知り合いやらはおそらく生きてもいない……だろう。これに関して何か思うのは後。今は、自分のことで手一

杯だ。

ともあれ、婆さんの肌の色と言語からしてここは日本のようだし、言語関係では問題なさそうだ。ところで、此処は日本のどの辺りだろうか？ 思い出すために、婆さんとの会話の内容を思い出してみる。

『がくえんとし』の『あんぶ』が私の手綱を握ろうとしている。昨日の婆さんの言葉だ。あんぶってのは、そのまんま暗部だろう。手綱を握るってことは、婆さんもままたない立場にいるらしい。さて、となると『がくえんとし』っていうのが地名かもしれない。組織とか政府の名前になってくるんだろが、

『学園都市』？

んー？ いやいや、今なんか思考にノイズが入ったな。有り得ないことは考えても仕方がない。とりあえず『ガクエントシ』とかいう横文字（？）はスルーするとして、他の単語について考えてみようか。まったく、こんなことならもう少し会話しとけばよかったな。このままじゃここがどこかもわからない。

『てすためんと』。これは正真正銘ただの『テストメント』だろう。証とか、信条だとかといった意味だったはずだ。あと、他に聖書関係の意味もあったような。

科学の街とか言う割りに、聖書だとかといったオカルト風味のモノを扱うなんて、皮肉なもんだな。そういえば、超能力も科学で証明したとか言ってたっけ。そりゃすごい。一〇〇年近く文明が進化とかいったが、それ以上かもしれない。

「なあおれ、そろそろげんじつみようぜ。いや、それをみとめて」

げんじつをみる』っていうのもおかしなはなしだけどさ」

気がついたら、口がそう動いていた。何がって？ そりゃあ、決まってるだろう。いや、分かっていたんだ。テストメントがどういう機械を指しているかも、ガクエントシの暗部が何を意味しているのかも。まして超能力を科学で証明という『設定』がどういことなのかも。

『がくえんとし』、『超能力』、『暗部』、『テストメント』、『テレパス』。どれもこれも、『とある作品』を表す符号としては十分すぎるだろう。仮に『違う』としても、ここまで似通った『設定』ならば、最早大差ないと言っても過言じゃないだろう。

ガクエントシってのは、横文字じゃない。『学園』の『都市』だ。分かりきったことだ。何せ、さっき俺は善人ってワードからそのナンバーワンを連想したじゃないか。

ええ、おい。神様。いるのならあんたを呪うぜ。せめて、よくあるパターンみたいに「あなたは死にました、この世界に転生します」くらいのアナウンスは入れてくれよ。

だからこういう風に混乱するんだ。プロローグでここまで時間かけるなんて聞いた事もないぜ？ ……だがまあ、終わったことは悔やんでも仕方がない、か。本当、どういう原理でこうなってるのか、さっぱり分かんが……。

てか、退屈ながらも順風満帆だった俺の人生返してほしいと言うか、色々あるが、そこは飲み込んでおくか。

と、いつわけで宣言させてもらうことにする。

…。
なんで『とある魔術の禁書目録』^{インデックス}の世界に転生してんだよ……

01（後書き）

このSSは原作二二巻までの情報を元に展開を構成しています。よって、新約以降の設定とは食い違う点が結構出てくると思います（特に魔術関係）。

なお、作中で違和感を感じる文章が出てくるがありますが、それが仕様であることもありますのでその場合は指摘して頂いてもスルーすることがあります。

また、スルーした箇所が重大な伏線ではなくただの小ネタである場合もあります。重ねてご了承ください。

02（前書き）

まだほのぼのです。

俺がこの世界に『転生』（？）して、数日が経った。

絶賛鬱なう、である。

「うつつ、ぐいつ、ええぐつ」

およそ赤ん坊らしくない、噛み締めるような涙を見せているのは、俺。そして、見せている相手は、祖母。

彼女の名前は親船最中というらしく、いきなり学園都市の重鎮と関係持つのかよ——と激しく突っ込みたくなったが、それどころじゃない。

何せ、原因不明だが俺は慣れ親しんだ体を失い、友人や家族と一生会えなくなってしまったのである。ごく普通の転生だと思っている婆さんには、「西暦が一世紀分違う」と誤魔化しておいたが、ぶっちゃけ一世紀どころか世界が違うのだ。

「おお、よしよし。お願いですから泣くならせめて赤ちゃんらしく年相応に」

「だつで、だつでえ……！」

親船小豆、生後数日。

普通の転生者は割りと簡単に乗り越えてるが、家族との永別って相当キツイもんがあるんだよ？

side 親船最中

娘である親船汁粉は研究職のため、その夫、親船羊羹は警備員のため、『彼』が目を覚ましたときに居合わせなかったのは僥倖でした。

なにせ、『彼』——尤も性別は女の子ですが——は、遠い時空を超えてきた転生者だったのですから。

『転生者』。本来ならば一笑に付すワードですが、しかし『彼』の様子を見ると、それも嘘ではないように思えます。なんでも、『彼』の暮らしていた時代に学園都市はなく。当然、学園都市の科学の粋を集めて作られた技術や、その最たるものである『超能力』など欠片もなく。

『彼』は、まったく知らない世界にいきなり放り投げられたも同然の状態でした。

何が、娘の為だ。私は過去の自分の考えに唾を吐きます。娘の為に、『彼』の人格を消す。間違っても言うてはならない言葉でした。確かに目の前にいる『彼』は、確かに性格はおかしい。普通の赤ちゃんではないです。でも、それが何だというのですか。

今こうして私の胸で泣いている『彼』——いや、彼女は、紛れもなく『本物』で、ただ人と違った個性を持っただけの、私の孫なのです。人並みの心を持ちながら、人並み以上に辛い環境にいきなり投げ出されて、それでも誰かに当たることより悲しむことを選ぶ、心の綺麗な子なのです。

たとえ罵ったとしても、あんな冷たい言葉を投げかけて良い、投げかけられて良い存在ではなかったのです。

そうそう。僥倖というなら、彼女を生後間もなく私の私室で保護していたのも僥倖でしょう。

彼女は、時空を越えた転生者です。しかし、科学の街である学園都市でそんな非科学的な現象が起こるはずもない。最近では世界の『軸』を研究することで、世界の時間軸の謎を解明する研究もされていると言いますし、彼女が時空を越えた転生者であるとバレてしまつたら、きっと非道な実験の餌食になつていたことでしょう。

通常、学園都市はその細部にわたるまで滞空回線アンダーラインという諜報機械によつて情報収集されていますが、時期統括理事会アンダーライン確定といわれ、学園都市の外交を一手に担っている私の私室に、滞空回線の侵入権限はありません。つまり、この情報が他にもれることはないということ。

彼女のパニックが小康状態になつたところで、私は彼女の涙まみれの顔を拭きながら尋ねます。

「私達では、代わりにはなれませんか……？」

彼女は、発作的にパニックを起こし、大泣きするものの、それ以外は年若い男性と同程度、いやそれよりも上くらいの冷静さを備えています。むしろ、そうして泣き喚いた後、周囲の人間——私の心を心配するそぶりさえ見せることのできる、心優しい精神を持つて

います。

大泣きして、パニックになっても近くにいる私に罵声を浴びせたりしないのが証拠。どれだけ取り乱しても、相手を思いやる心を持っていることの証明です。

「……う、そ、そんなつもりは………」

私はここ数日、先程のように発作的に大いに取り乱す彼女の悲しみが落ち着いたとき、こうやって質問することになっています。

他人のことを思いやれる、良い子。私がこういう風に質問をすれば、当然返しに困ります。少し、いや大分意地悪な質問。でも、これが彼女にとっては特効薬だと信じています。

最初彼女が抱くのは、遠慮。偽りの親愛。でも、それも積み重なれば、いつかは本物の親愛に変わってくれる。

人間の感情というのは、簡単にコントロールできます。こういう言葉をかければ、彼なら彼女ならこう考える。その積み重ねで、人の心は簡単に曲げることができる。彼女も、こうした『遠慮』を積み重ねることで曲がっていく。

そういう私の考えを、『残酷だ』『冷血だ』と言う人がいるかも知

マッドサイエンティスト

りません。さすが学園都市、性根の曲がった科学者の精神だ、と罵る人がいるかもしれません。でも、そのどこが悪いのでしょうか？

たとえば、恋愛で譬えてみましょう。

つり橋効果、というものがあります。危険を共にすることで連帯感が生まれ、それが恋愛感情だと錯覚することから始まる恋。これも、脳内物質が分泌されることで生まれるモノですが、脳内物質で生まれる恋に違和感を感じないでしょう？

お見合いから成就する結婚で一生幸せになる人も居れば、何年に

もわたる恋愛の末の結婚が一年で破綻することもあります。きつかけが何だろうと、最終的に当人が『幸せ』になれば、それでいいのです。

この場合も、それは同じ。私のちょっとした配慮のない言葉によって彼女の心に遠慮が生まれ、彼女がその遠慮を『家族に対する愛情』だと錯覚する。ただそれだけのこと。

そして、その錯覚を本物に変えてみせる。それが、彼女を救う一番の方法だと信じて。

『冷血』、『残酷』、結構です。

マッドサイエンティスト、大いに受け入れましょう。

現に彼女の心は、家族や友人を失った悲しみで折れそうになっている。それを見て、なんとかかする術を持っている私が、なんとかしないことのほうが、よっぽど冷血です。

普通の赤ちゃんとは違った事情を抱えているからといって、その心が折れるのを黙って見たまま、なんとかしようともせずにいることのほうが、よっぽど残酷です。

口先で彼女の傷ついた心を騙す（すくう）ことさえ許されないのなら、私は善人と言うくだらないレッテルなど願い下げです。最低なマッドサイエンティストと呼ばれたって、後悔などしません。

中身が何であろうと、彼女が私にとって、私の娘夫婦にとってかけがえのない大事な存在であるという歴然たる事実が揺らぐことなどありえないのです。

「フフ、もちろん代わりになどなれるはずもありませんし、なるつもりもありません」

私が自嘲を含めた笑いを浮かべると、彼女はほんの一瞬、——そう、ほんの一瞬だけ——悲しい顔をします。それは、心が曲がり始

めている証拠。心が、精神が、『私』という拠り所を求めて曲がり始めている兆候。

そこで、私は意地悪な笑顔を浮かべて言っておけるのです。

「私は、私たちは、あなたの無二の家族なのですからね。『親船小豆』ちゃん、私たちは、あなたの誕生を祝福します」

『忘れさせる』。それは、どれほど残酷な行為なのだろう、と私は思います。私の言っていることは、無二の家族とは、彼女の前世の家族のことを忘れさせることに相違ありません。

彼の思い出を忘れさせる。捨てさせる。それは、『彼』を殺すということと殆ど同義でしょう。個人を個人たらしめるのは思い出であつて、思い出の放棄とはすなわち個人の死なのですから。

ですが、彼女は既に一〇〇年以上前に死亡していて、家族は既にこの世にいないです。それならば、いつまでも家族の幻影を追いかけてさせてはいけません。

エゴ、といわれればそうかもしれませんが、『彼』の為を思えば、彼女はここで壊れてしまったほうが幸せなのかもしれません。ここは『彼』の生きてきた世界ではないのですから。

ですが、私は『彼』が壊れる様を黙ってみているには少し甘すぎました。彼に対しても、そして私やその娘夫婦に対しても。

私の心のうちを知ってか知らずか、『祝福』という言葉で自分の存在を認めてもらえたのが嬉しいのか、彼女は目に涙を浮かべていました。まったく、生後数日だというのに、本当に感情豊かな赤ちゃんです。

「ハッピーバースデー、小豆ちゃん？」

私がそういつて頭を撫でると、彼女——小豆ちゃんは、今度こそ

大声で泣き叫びました。私は、そんな彼女の頭を優しくなで続けます。

私の、たった一人の大事な孫娘の誕生を祝福しながら。

side 『彼』

最初は啞然だった。次に動揺、そして混乱。突然変わった環境に、めまぐるしく変わっていく感情。それがひと段落ついたときにあったのは、喪失感。いままで当たり前にあった日常が、幸福が、消え去った実感。

日常の、何気ない瞬間——たとえば、ふと眠りから覚めて目覚まし時計を見ようとしたときそこに何もなかったりとか、腹が減って飯を食べようと思って自分が台所までまだ歩いていけないと気がついたときとか、とにかくそういったちよつとした違和が、俺の日常が消滅した実感を与えてくる。

最初こそ、転生がどうの、神様がどうの、web小説がどうのとけたたましく脳内実況を繰り返していた俺だが、それにも限界があった。

ああ、仏頂面ばかりだが心優しい親父の小言はもう聞けないのか。
ああ、喧しく騒がしく姦しいお袋のメシはもう食えないのか。

ああ、大して可愛くもない可愛げもない妹と顔合わせて喧嘩することできないのか。

ああ、小学校から馬鹿やり続けてきた親友と罵り合うこともできないのか。

悲しかった。ただただ、只管に悲しかったのは覚えてる。自分でもわけがわからないまま大号泣していた。俺と言う存在はもう、この世の誰も証明できなくて、これは死よりも恐ろしい事態なんじゃないかと泣きながら思った。

それが、数日間続いた。

一通り心の中の膿を吐き出し、涙が少し落ち着いて、自己嫌悪に陥る。思い切り、婆さんの前で泣いちゃった――。俺は、少なくとも婆さんにとっては、唯一無二の孫なのだ。

その孫が、自分や自分の娘夫婦のことではなく、見ず知らずの誰かのことを想って泣く。これほど残酷な仕打ちはない。だが、俺はまるで赤ん坊のように（まさに今赤ん坊なのだが）自分の感情をコントロールできず泣きじゃくるばかり。

パニックになり、取り乱す度に婆さんへの罪悪感が募っていた。

「私達では、代わりにはなれませんか……？」

その日も、婆さんは悲しそうに俺の瞳を見つめてきた。毎度、婆さんは泣き止んだ俺にそう問う。柔和な笑みの裏側には間違いない悲しみが張り付いていて、それを垣間見てしまった俺はさらに自己嫌悪に陥る。

普段は黙って答えられないのだが、もうどうしようもなかった。

思う存分泣き、嘆きたい気持ちと、婆さんを、この世界の両親を労わる気持ちと、二つの心の板ばさみ状態になっていた。

「……う、そ、そんなつもりは………」

そんなつもりはない、とはいえなかった。そんなつもりは『ある』のだから。そんな俺の心境を見抜いたのか、婆さんはフツと自嘲げに笑みを浮かべた。柔和な笑みが、悲しそうな色を見せる。

「フフ、もちろん代わりになどなれるはずありませんし、なるつもりもありません」

婆さんの口からその言葉が放たれたとき、俺は世界との唯一のつながりが断ち切られたように感じた。自分でそうなるように仕向けたくせに、本当にそうなってしまうと。なんだ、この感情は。まるで、駄々を捏ねてばかりの子に対して親があえて離れたときの、子供の感情。

「諦めないで」、と俺の心は訴えようとしていた。それを、大人である俺の自我が抑え込める。そんなみつともないこと、口にできるか。

「私は、私たちは、あなたの無二の家族なのですからね」

そういわれた瞬間、俺は頬がかあつと熱くなるのを感じた。よかった、まだ見捨てられたわけじゃない！ それだけで目に涙が浮かぶのが自分でも分かった。まったく、大の大人が情けないザマだけど、そのくらい俺の心は弱ってた。

「『親船小豆』ちゃん、私たちは、あなたの誕生を祝福します」

婆さんは、そういつて優しく俺の頬を撫でてくれた。今度こそ、俺は声を上げて泣いた。

「ハッピーバースデー、小豆ちゃん？」

その日から、俺は『親船小豆』となった。

03（前書き）

まだまだほのぼのです。

「——と、言うようなことがありましたねえ」

「……ッ、つたく、忘れるババア！」

それから五年強。私は元気に幼稚園生やってます。今は二月、春になったら私もようやっと三年生。幼稚園最後の年度が始まるわけだ。それを越えれば小学校入学、そして能力開発。今からどんな能力が目覚めるか楽しみだったりする。

最強オリ主よろしく全部の能力が使えるようになったらいいんだけどな。全能力使用可能で超能力（レベル5）級とか。……いや、あんまり稀有な能力に目覚めても大変そうだな、学園都市。やつばサイコキネシス念動力系がいい。日常生活でも便利そうだし。

……というわけで、あれから親船小豆として過ごしてはいるものの、祖母ちゃんは未だにあのときのことをからかい続ける。いや、黒歴史だよな。うん。大の大人（精神的に）が老婆ちゃんに頭撫でられて大・号・泣だぞ？ まあ、救われたのは確かだけど。

未だに昔のこと思い出してセンチな気持ちになったりするくらいだから、祖母ちゃんの言葉がなかったらと思うとゾツとしない気分これはもう恥以外の何者でもないわけで。そこを突つつかれると、こんな風に思春期の少年みたいな悪態しか吐けない訳。

「あら、あらあらあら？ 小豆ちゃん、何です？ その口調は」

くそ、しまった。

祖母ちゃんは、ことあるごとに私に女っぽい口調や仕草をするよう強要してくる。

今私がこうやって自分のことを『私』と呼んでいるのも、その所為だ。何でも、『いつまでも自分が男だと思っていると、そのうち痛い目見ますよ』だとか。

そりゃあ、思春期になったら体つきも嫌でも女っぽくなるだろうし、そのとき盛大に凹むよりはこうして慣らした方がいいのかもしれないが……、少なくとも口調に関しては問題ないだろう。

ここは仮にも禁書インデックスの世界。

最大主教はエセ古文調だし、みさかいもつと第三位の妹は説明口調だし、かみじょうさん主人公は三段活用なのである。ならば、セレブなお嬢様がヤロウ口調だつて何もおかしいことだつてないはずだ。ないはずなのだ！

「小豆ちゃん、確かにその口調はあなたの個性です。ですが――」

祖母ちゃんは、私の心を読んだかのような台詞を吐き、私の頭に手を載せる。すぐに反駁しようとする私を、祖母ちゃんは眼で抑えて、

「あなたは既に、『前世の記憶』という強烈な個性があるのですから、ぶつちやけもう個性とか要りませんよね？」

……んな身も蓋もないことを……。

「それに、あなたのお母様も常々嘆いているそうですよ？ 『小豆ちゃんはどこであんな言葉遣いを覚えたのかしら……』と」

前世で覚えました。

私の母さんと父さんは、どちらも仲睦まじく私のことも可愛がってくれるんだけど、私がいま手のかからない赤ん坊だったのも助けて母さんは研究職、父さんは警備員アンチスキルの仕事に精を出しまくってい

る。

どちらも仕事忙しいようで、何日かにいっぺんくらいしか顔を出さない。それでいいのか、両親。ま、私は大人だからどっちにも親愛の感情を持つてるし、授乳とか排泄とかも祖母ちゃんとかお手伝いさんがしてくれたからいいけど。

でも、そんなに忙しい母さんも父さんも祖母ちゃんの力のおかげなのか、危ない方面の仕事は廻ってきていないらしい。統括理事会すげえな。

「一応小豆ちゃんも今は女の子なんですから、いい加減女の子らしい身の振り方を学んだほうがいいと思いますけど？ もつと言うとその為なら私は学園都市のすべてを敵に回しても構わないとさえ思っています」

「なんでそういうところでそういう決意できちゃうわけ！？ そういうのってもつと俺がピンチになったときに言ってくれよ勿体無い！」

そんな感じで、こういう風に祖母ちゃんと漫才じみたことをするのが、私の日常である。え？ 同年代の幼児と遊べよ？ ……いや、お坊ちゃん幼稚園は園外での園児同士のふれあいが少なくてねー……。

「で、この有様ってか」

そういつて俺……いや私は自らの格好を姿見で確認していた。

今の私の服装は白っぽい色を中心に、フリルやらピンク色やらいろんな意匠がごたごたととりつけられている、いわゆる『姫口リ系』な感じ。

この体になつて五年強も経っているので流石に性別に関する違和感はなく、趣味嗜好に関しては別問題だ。『カジユアル系』の服装なら抵抗なく着れる（にしても五歳児が着ると違和感大だが）が、こういう『可愛い系』はなんとも違和感を感じる。

しかも、それをお手伝いさんに公開するというんだからやってられないわけだ。よくここまでされて価値観が変わらないもんだ、としみじみ思う。

「どうしてこうなったし」

ふつと苦笑いしつつ、こうなつた経緯を思い返す。こんな恥ずかしい格好をさせられたのは、一度や二度ではない。今まで、私の口調が乱れた度にこうした恥ずかしい格好をさせられてきた。

最初こそ顔を真っ赤にしてスカートの裾を必死に下ろして……などという初々しい反応をしていたもんだが、今となつては慣れたもの。そうした反応こそ相手を調子に乗らせると学習した俺もとい私は、あえて無反応を貫くことで祖母ちゃんの思惑に一矢報いてきた。

「はいっ、小豆ちゃんっ。バッチリだよっ」

私の髪型をセットしていたお手伝いの御崎美奈兔さん（25）独身が、そう言って肩をポン、と叩いて私を立ち上がらせる。

美奈兔さんは私が転生してから初めて会った家族以外の人間である。この人に会い、その口調を確認して「ああ、こいつて禁書の世界なんだよな」としみじみ思ったのは懐かしい記憶だ。

もう、今となっては口調とかそういうったものも気にならない。つつーか私自身『奇特な口調』の代表格みたいなモンになってるしな。

ちなみにこの美奈兔さんの勤務態度、雇い主の孫娘に対するものとしては落第を通り越して免職モノなんだが、ウチの職場の空気は結構緩いらしく（祖母ちゃんとグルになって私のことをからかっているんだから当然か）、結構他の人も私のことを「小豆」とか「小豆っち」とか「あずにゃん」とか好き勝手呼んでいる。最後はちよつとマズイ気がするんだが大丈夫か？

そんなことを考えつつ美奈兔さんに手を引かれ、衣装室から出る。衣装室の外は普通に広めの廊下なのだが、祖母ちゃんの粋な計らい（笑）により何かのファッションショーみたいな装いになっている。

……っ。

なんだか顔に血が集まってきたような気がするけど、そこは前世の経験を活かし平常心を装うことで誤魔化す。さあ、みんなの前をすーっと歩いてくるっと思ってコーナーすればそれでおしまい、そもそも今の俺はただの幼女。恥ずかしいことなんざ何も無い！！

side 親船最中

……ふうむ、恥ずかしさを押し隠したつもりになって真っ赤な顔で得意げな表情をしているというのも、これはこれで……。

そろそろ潮時かと思っていましたが、もう少しこれで楽しんでみるのもアリでしょうか……。

あ、こけた。

むう、必死に押し殺しているようですが恥ずかしさが顔ににじみ出ていますよ。

side小豆

終わった……。

平静を装うことに夢中で途中ずっこけて思いつき恥ずかしい思いをしたり、着替えに戻ったとき姿見に映った自分の赤面顔に不覚にもグツと来て自己嫌悪に陥って喚いたりもしたが、とりあえずなんとかいつもの服装（ワンピース）に着替えることが出来た。

着付けしてくれたお手伝いの土斑健詩さん（18）^{つばけんし} 彼氏持ちにゲラゲラ笑われたが。

「ギャハハハハハ！　だアから小豆ちゃんは変に強がつたりしねエのが一番良いんだっての！　現に最中さんにこんなに軽くあしらわれちゃってんじゃないって！」

着替え終わった俺の背中を乱暴にバンバン叩くお手伝いさん（注釈しておくが、一応俺の方が上司である）が、健詩さんだ。彼女は別に転生者というわけでもなく、普通に彼氏もいる（らしい）正真正銘の女性だ。

なのに何故こんな木原一族みたいな口調なのかって？　……………そんなことは俺……………じゃなく、私にも分からない。

「いやでも、なんか祖母ちゃんの手帳にハメられんのも癪じゃん？　お……………じゃない私にだって一応プライドあるしさあ」

「プライド（笑）」

「笑うなーっ！！」

……………全く。コイツらと会話していると本当に疲れる。かといって母

さんと会話するのも疲れるし、父さんと会話してても間が持たないし……。やっぱり、幼児の心に戻って園児と戯れるのが一番面白いな。ガキどもはみな心が純真だから私のことからかったりしないし。……って、考えてたらなんか空しくなってきた。手玉に取られるから子供に逃げるって私どんだけ惨めなんだよ……。

「小豆ちゃん、着替えはもう終わりました……。あら。お楽しみ中だったみたいですね」

回想してるうちに何だか悲しくなってきたので健詩さんに抱きついてすすり泣いていたところに、祖母ちゃんが乱入してきた。お楽しみって何だよ、お楽しみって。そりゃ確かに私は元男だが、今は幼女だから割と前世みたいな性欲はないんだがな。

……こうしてだんだん女になっていくのかー、と思うと何だか自分が自分じゃなくなるみたいで怖い。まあ、『人間なんて変わっていく生き物ですから趣味が変わるのも性別意識が変わるのも同じ』『変化』です』って祖母ちゃんが言ってたからそこまで深刻には考えてないが。

「お楽しみって何さ、お楽しみって……」

呆れて溜息をつく私に祖母ちゃんは苦笑し、

「はいはい。ごめんなさいね。この間小豆ちゃんが気に入ってたモンブランケーキ持ってきましたから。恥ずかしい思いをさせてしまったお詫びということで、一緒に食べましょう？」

……こういう風に食い物を出されるとなんとなく態度が軟化してしまうのは、残念ながら転生による影響ではなく、前世から続く悪癖のうちのひとつだったりする。

「二度目の幼稚園生活はどうです？」

所変わってここは祖母ちゃんの私室。

当然、アンダーライン滞空回線（だっけ？）による盗聴の心配もなく、ここは専ら私と祖母ちゃんの秘密会議の場所みたいになってる。

「どうですも何も、そもそも前世の幼稚園時代なんざ覚えてないから結構新鮮だな。退屈でもあるけど。たまに前世の幼稚園時代の記憶がフラッシュバックしたりしてちょっと鬱入ったこともあるけど、まあそんな感じ」

これまでも、前世のことをふいに思い出したりして気分が重くなることは多々あった。たとえばこのモンブランケーキも、前世の好物だったから最初に見たときは思わず泣きじゃくった覚えがある。恥ずかしいなあ……。

まあ、そんな不安定極まりない精神状態の私がこんにちまで無事生きているのは祖母ちゃんのお陰だ。この人、精神科医の免許でも持ってるのか？ と思うくらい人を慰めるのが上手い。

しかも、一時の慰めじゃなくて慰められた後も楔みたいになんか心の中

に残って、落ち込んだときに励ましてくれるような慰めをする。最早慰めというより一種の洗脳な感じさえする。

正直、祖母ちゃんがいなかったら私は数百回くらい鬱になってたと思う。祖母ちゃん様様だ。

「そうですか……。やはり三年間はあつという間でしたか？」

「そりゃあ、私だってこれでも中身は大人だからな。でもそれなりに童心に帰って楽しんでるぜ。小さい子に囲まれるってのもいいもんだ」

「そうですかロリコンさん」

「今は俺もロリだったのー!!」

「『俺』？」

「あ、いや、私……も、ロリです……」

改まって言うところとはかたなく恥ずかしいな。

「それにしても、よく頑張ってますね。あなた自身も言っていました、中身は大人だったと言うのに。幼児退行も起こさず私と談笑しておきながら、今のところ妙な噂をもみ消した回数が殆どないというのは私も驚いてますよ」

「ふっふっふ。俺はデキる園児だからな」

尤も、入園式が数日前のことのように思い出せるあたり、何とも園児っぽくない園児な気はするが。幼稚園では無用なミスを避けるために『人見知りしがちな無口キャラ』で通してるから、違和感を感じていた園児及び教師は少ないと思う。

ちなみに、私が通っている幼稚園は『私立咲原幼稚園』と言う。一三学区に存在する私立の幼稚園で、いいとこの坊ちゃんがこぞ通っている幼稚園だ。

一応私もVIPの家の娘なので、親船家の体面を保つ為に此処に

通うことになった。中学校からは能力主義になるため坊ちゃん校はなくなるらしいが、小学校まではこうなるから我慢してくれ、と前に祖母ちゃんから話されていた。

「その割には、何回か妙な噂をもみ消した時に聞こえてきたのはどれもしょうもな……もとい微笑ましいものでしたがね」
「うっ……」

……いや、それには深い訳があるんだ。流石に、私といえど何回かミス犯したことはある。一度目はガキ大将っぽい奴に髪を引っ張られた時、二度目はガキ同士の喧嘩の仲裁に入った時、だ。

一度目から順番に、一年に一回のペースで私はミスを犯していた。

「確か、一番最初の際は武田財閥の御曹司に髪を引っ張られた瞬間、カウンター気味に鳩尾に左フックを決めてそこから馬乗りになったんでしたっけ？」

「むしろくしゃしてたんだ……」

丁度、あの時は私が四歳の頃だったか。私の目の前でぎゃんぎゃん騒ぐ躰けのなっていないガキが耳障りで、うるさいなーと思いつつ大人の余裕でスルーしていたら、急にそいつが私の方を振り向いてきて、あるうことかこのびこんと跳ねたサイドテールの先端を引っつかんできやがったのだ。

痛い痛いと言えてみるものの興味津々なのか中々お放しにならない為、ならこっちからOHANASHIしてやるということで左フックからの馬乗りコンボを決めてやったのだ。

……そしたらその武田というのが結構厄介な輩で……。

その後、私のことを目の敵にしてスカートめくるやら突き飛ばすやら、まさに幼稚園児な攻撃をしかけてくるようになった。まあ私

も流石にサイドテール掴まれたくらいで大人気なかったかな、と思ったからしばらくそのまま放置していたんだが……。

……そいつ、馬鹿だから父兄参観の時にも同じような嫌がらせを仕出かしちゃって、その後両親と一緒に『親船』に詫びに来たというお話だ。

あんまり武田の両親の謝りようが不憫だったから私が普通に武田に「あそぼ？」と演技決めてやってその場を治めることに成功したのだが、なんかそれ以来武田の奴付け上がったのか、ダメージを与えるタイプではないがちょこまかとしたいたずらが増えたような気がする。

ちなみに、いたずらは今も継続中だ。

「で、次が金山グループの令嬢と桜運輸の御曹司の喧嘩の仲裁に入った時、でしたっけ？」

「黒歴史だ……」

五歳になり、学年も一つ上がった時のことだった。私の横の席で女の子と男の子がつかみ合いの喧嘩をしているのを見つけたので、やかましいがわざわざ仲裁に入って説教するのも大人気ないし、とりあえず先生でも呼んで適当に落とし前つけてもらおうと思ってたわけだ。

そこでそーっと立ち上がって先生に喧嘩してるよーと報告しようとしたら、二人とも先生に見つかって叱られるのが怖いのか、それともそこから自分の親に情報が伝わるのが怖いのか、私のことを捕まえて口封じしようとしたわけだ。

私も流石に大人しく捕まって痛い目見る趣味はないので、手早く二人にビンタをかまして大人しくさせた。

で、その後『怒られるのが怖いから』といって目撃者をとっ捕まえ

ようとするとは何事か』とSEEKYOUをかましたら、そこを先生に見つかり……。

別にお咎めがあったわけではないが、祖母ちゃんとお手伝いの方々から一日中生暖かい目で眺められながら過ごしていた。……今思い出しても恥ずかしい。

「にしてもさあ、祖母ちゃん。このモンブランケーキいつつも買ってくるけど、どこのなの？ 今度自分でも買いたいから教えてくれよ」

最後に取りつておいた栗にフォークを突き刺しつつ、私は何気なく祖母ちゃんに問いかける。しかし、祖母ちゃんからの返答はない。

怪訝な表情を浮かべながら祖母ちゃんの顔をうかがうと、

「……小豆ちゃん」

「はひっ!？」

いつになく真面目な表情をした祖母ちゃんの顔があり、私は思わず萎縮してしまった。蛇ににらまれた蛙のような心境で祖母ちゃんの次の言葉を待つ。

「あなたは——」

「ごくり。」

「もう少し、女の子っぽい口調を身につけたほうがいいんじゃないですか？」

「……はあ？」

「一人称は『私』になりましたが、他のところはまだまだです。っていうか、普通に男口調のままなのでむしろ違和感バリバリです。どうせ、心の中では口に出しているよりも『私』と『俺』の比率が同じくらいなんでしょう？ 駄目ですよ。男っぽい口調もそれはそれで需要があるかもしれませんが、そんな需要は普通に生活するうえでは絶対必要ありません。せつかく『名家の令嬢』というステータスがあるのですから、それを最大限に引き立てる口調^{キャラ}作りをしなければ

「いやいや待て待てなんか色々おかしいだろ！ 大体口調と書いてキャラと読ませるってどういうことだよ！？ 美奈兔さんとか健詩さんとかあれって全部キャラ作りの一環だったの！？ そういうことなの！？ 俺もう何を信じれば良いんだよっ！？」

「『俺』」

「あ」

……この後、私はみっちり女言葉を学ばされた。

……しばらく内心の口調も完全に女っぽくなってたことに気が付いたときは軽く愕然としたわ……。

03（後書き）

- ・まだこの頃は口調が『私』に移行しきれていません。
- ・痛い目に遭ってないので、割とボロが多いです。

六月二五日修正

04（前書き）

まだまだまだほのぼのです。（前半は）

『親船小豆、……親船小豆？』

「ひ、あ、」

i - padのような形状の携帯端末から表示される『ソイツ』の音声に、私はただ呆然と口から言葉にもならないただの『音』を発するしか出来なかった。喉はひゅっひゅっとうと空気を押し出す音だけを鳴らし、体の芯がまるでドロドロに溶けてしまったみたいに私の体はふらふらと揺れていた。

私の目を通して見る世界は、既にすべての色彩が失われていて、それでいて視界の端は何かを急き立てるように赤く染まっていた。多分、これは夢なんだろうと必死にそう思おうとしたけど、そんな私の逃げ道を潰すみたいに、心臓は耳障りな音と鬱陶しい鼓動をたたき続けていて。

『聞こえなかったか？ どうやら動揺しているようだから要点を掻い摘んでもう一度言わせてもらうが、』

『ソイツ』は。

若干七歳の少女と会話するには少し——いや、かなり大物すぎる『ソイツ』は。

男にも女にも大人にも子供にも聖人にも囚人にも聞こえる『ソイツ』の声は、次にこう告げた。

『——宣戦布告だ。これから、数十の暗部組織が君の命を狙うだろう。……それと、入学おめでとう』

お前は死んだ、と。

その日は、私の今回の人生の中で間違いなく五指に入るくらい幸せな日……………『だった』。

此処は名門『七里が丘小学校』。厳正な入学試験に合格した優等生だけがここに入学し、トップクラスの開発を受ける権利を得ることが出来るんだけど、運営組織と理事長の癒着が酷く、今となつてはお金さえ積みめば適当に入学はさせてもらえるから、学校としての能力開発のレベルは大して高くもないらしい。

むしろそのせいで大企業の社長令嬢やら御曹司やらがたくさん入学してしまい、一種のお坊ちゃん校と化している。最近なんてそんな風にのさばっている連中からのオーダーでテーブルマナーまで教え始めてるんだから、まさに本末転倒だよ。

ちなみに、何で入学試験で合格した人間はトップクラスの開発を受けられるのか、だけど、何でも最近の研究で、脳が発達していればいるほど演算能力の伸びしろは高まり、それだけ能力のレベルの上がり幅が増える可能性が高くなるから、らしい。

レディオノイズ
量産能力者計画で遺伝子のスペックが能力開発に関係ないってことは証明されちゃったから眉唾な情報だけど、幼い時点で脳が発達

——つまり情緒が安定してるってことは、それだけ魂の素質も高まる、と説明すれば納得が行く解釈になるんじゃないかなあ、と思ってる。

さて、今日は私の小学校の入学式で。私は、新入生代表として挨拶をすることになっていた。それは私が統括理事会の一員（一年ほど前に前任が引退したためになった）である親船最中の孫娘だから、じゃない。先日受けた入学試験で、私が新入生でブツギリ一〇〇点満点主席合格という偉業を成し遂げたお陰……らしい。

転生してから七年も経ってるから、もう私の前世の知識もなくなってるんじゃない……と心配してたけど、どうやら杞憂だったみたい。教師連中からも『流石は親船さんの孫娘ですねー』と感心された。………こういう感心のされ方は複雑だけど、まあそこまで気にするほどのことでもないしね。

一〇〇人弱の新入生とその倍以上の保護者がすっかり入ってもまだがらんなほど大きな体育館の中心で、私は原稿を手にとって礼をした。

お父さんとお母さんは私の勇姿を保護者席から見ている。当然、そこには最中お祖母ちゃんの姿もある。皆、仕事があつたにも関わらずそれを休んでまで私の入学式に来てくれたのだった。まったく私は幸せ者だね。

「春の日差しが——、」

新入生挨拶が始まった。原稿は学校側が用意してくれている。私がか用意しても良かったんだけど、それが慣例らしいので倣っておくことにした。

……にしても、注目されるとなんだか自分の服装が気になってくるよ……。特にこのスカート、何でこんなに短いのか？ 小学生の穿

くスカートなんだから膝下くらいでいいだろ。つつーか私の前世で女の子が穿いてたスカートは大体膝下だった、と思う。

私の穿いてるスカートは膝上何センチか知らないけど、太腿が結構露出した感じになっている。正直恥ずかしい。これもロリコン人口が異常に多い禁書ワールドの法則かな……。神様なんてクソくらえ、だよ。

原稿を持っていないほうの手でスカートの端をちよいちよいと弄りつつ、原稿の最後の台詞を読み上げる。

「新入生代表、親船あじゆき」

……………噛んじゃった。

「あははっ、あはははははは——っ!!」

私の目の前で足をバタつかせて大爆笑しているのは、私の母『親船汁粉』。

お母さんは、非常によく笑う人間だ。どのくらいよく笑うかと言うと、私が新入生代表の言葉の最後の台詞で噛んだ瞬間から今こう

の顔合わせで終了だが、この後関係系列の病院に行って能力開発をする予定。

先ほどからこの馬鹿お母さんが馬鹿笑いをしていても店員さんから『黙れ馬鹿』といわれないから分かると思うけど、別に格式のあるレストランというわけではなく、ただのファミレス『ジョセフ』。前世で言うところ『ジョナサン』に位置するモノかな。

「もう。いい加減にしてよお母さん。あんまり蒸し返すとキライになるよ?」

「やー! それは困るうー!」

私がそうやってジト目で視線を送ると、お母さんはわざとらしく慌てて私に縋りつく真似をする。……馬鹿にしてやがるねコイツ。

……もういいや。知らない。相手してるだけ時間の無駄。やっぱはお祖母ちゃんみたいに優しく慰めてくれるほうがいいよ。

「おお、よしよし小豆ちゃん。意地悪なお母さんに苛められたのですか? それは可愛そうに……。お祖母ちゃんの胸でお泣きなさい」「うえーん、お祖母ちゃん!」

わざとらしく両手を広げてみるお祖母ちゃんに、同じくわざとらしく飛び込む私。……幼稚園の時より、心なしかお祖母ちゃんが小さくなった気がする。このへん、私の成長とお祖母ちゃんの老化を感じる次第だ。……何だかしみじみしてくるなあ。

「ほらほら小豆ちゃん、女の子が食事中に暴れてはいけませんよ。お行儀よく座って」

「はあーい」

お祖母ちゃんはいしばし私と戯れると、頃合を見て真顔に戻って席

に座らせた。私も言われたとおり席に座り直して、目の前にあるお子様ランチを食べ始めた。……ガキっぽいと言う事なかれ。転生に伴い味覚もガキと化した私は、今ゆっくりと味覚を大人風に『慣らしている』最中なのだ。

お祖母ちゃん曰く、『味というのは心ではなく脳で感じるもの。子供のうちは本能的に甘いものを欲し、刺激の強いものを嫌う傾向にあります。小さいうちから無理に苦いものや辛いものを食べるとそのときの苦手意識から大きくなってからも苦手になってしまいうので、ゆっくり、ゆっくりと、子供向けの味の良いものから慣らしていくといいでしょう。なあに、ほんの二、三年の辛抱ですよ』……とのこと。いや、私も頷いちゃったけど二、三年って結構長いと思うよ？

「むう、小豆ちゃん私達よりもお母さんに懐いてるようない……」

「……当然だろう」

不満そうなお母さんに、怒ってるようなお父さん。そりゃ、子供に手がかからないからといって仕事満載、ろくに会いもしないような生活送ってればお祖母ちゃんに懐くのも仕方ないよね。……それに、お祖母ちゃんは私の『事情』を知ってるし。余計に心許せる存在なんだよねー。

「あ、お母さん、その貝ちようだい！」

そこで私は、おもむろにお母さんの食べているアサリのパスタを指差す。

……だからといって傷心の母を放っておくほど私も鬼畜じゃない。確かにお父さんとお母さんは私のことを放置気味だけど、それだけたくさんお金を稼いでたまの休みには目一杯奮発して私と遊んで

くれるんだから。そのやり方は、子供をお金で釣るようなやり方でもあるけど、そこは私も精神は大人だから知らないフリして良い子に成長しておく。

親としては落第なお父さんとお母さんかもしれないけど、それでも愛情があるって分かってるから別にいいんだよ。教育のあれこれは、これから私と一緒に生活していく上で学んでくれれば、いいじゃない。ガンバレ両親、目指すは及第点、だね。

「うふふ、このアサリに目をつけるとは流石小豆ちゃん！ でえーもおー……あげない！ 私もアサリ食べたかったんだもおーん！」

「うわぁ……。なんという大人気なさ……。せっかくフォローしてあげた途端これってどうなのさ……」。

「なんてね、はい。一緒にパスタも食べる？ おいしいよ」

「……食べる！」

貝の身を突き刺して、ついでにパスタも絡めたお母さんは、フォークを私の顔の前に差し出してくる。私はその綺麗な笑顔に満面の笑みで頷き、パスタと貝と一緒に食べた。……うん、幸せ。やっぱり家族団らんって嬉しい。

「……小豆ちゃん、おいしい？」

「……まだ早かったかも……」

でも私にはこのピリ辛はまだ早かったみたい。

その日の午後。

家族と別れて七里が丘小学校系列の病院に来た私は、診察室の前で一列に並んで椅子に座っている小学生の中に紛れ込んでいた。

……どれだけこの時を待ち望んだことか。まあ、最初は無能力（レベル0）だろうけど、それなりに頑張ればそれなりに何とかなる……はず。最悪一生無能力者（レベル0）でも学園都市のトンデモ科学力の恩恵にあずかれると思えば、『外』で暮らすよりずっと楽だよな。それに、無能力者（レベル0）なら学園都市の余計ないざこざに巻き込まれる心配もないし。

「……………」

そんなことを考え、緊張しつつも割と自然体で自分の出番を待っている、私の一個前の少女がカチコチに固まってることに気が付いた。

この子の名前は……確か、鬼ヶ島おにがしま絹子きぬこ。イカツイ苗字に反した可愛らしい名前のとおり、絹で織ったような肌の可愛い子である。眼福。

ただ、この子は親の裏口入学で入ったクチの少女であり、頭の出来はまあ小学一年生にしては良いとしても、とても高飛車な性格なのだが……、

「絹子ちゃん、大丈夫？」

「ただだつ、だいじょーぶとは何のことでごぜーますの!? ぜぜぜつ、全然問題ないでござーますの!」

……駄目だこの子、緊張のあまりお嬢様口調のメッキが剥がれるよ。

「絹子ちゃん、リラックスリラックス。どうせ強度^{レベル}が高かるうが低かるうが絹子ちゃんが生活に困ることなんてないんだから、ね?」

この子の実家、大金持ちだしね。いくら強度^{レベル}によって奨学金の額に差があるって言ったって、問題ないレベルのお小遣いはあるはず……まあ、そういう問題じゃなさそうだけど緊張状態のこの子からしてみたらそんなボロに気付く余裕なんかないよね。

「そつ、そーでございますわね! べつ、別にその言葉で安心なんかしてませんけどっ、い、いちおーおれーを言っておきますわ!」

……まだ口調が安定してないような……、あ、長音がなんか伸ばしたように聞こえる口調は元々か。緊張したときにこういう口調だと普段との区別がつかないのは大変だと思う。私は実際に声聞いているからまだマシだけど、もし字面だけで見たらきつと意味不明だね。

……それから、三〇分くらいが経過した。暇を極めた私は、近くの生徒とおしゃべりをしつつ絹子の開発が終わるのを待っていた。何せ、絹子が終われば次は私なのだ。いかに精神年齢が三十路を過ぎた頃とはいえ、能力というのは楽しみなものだ。どんなものが来るのか楽しみで仕方がない。

と、診察室の扉が開いて絹子が気持ち俯き加減で出てきた。残念そうな顔だ。……これは、無能力（レベル0）だったかな？ 可哀相だが、最初はそんなもんだ。下手に慰めても怒りを買っただけだろうし、あえて無視して診察室に入る。

部屋の中には、何やら色々な機材が置いてあった。どうやら、これ全部開発用の機材らしい。様々な薬品……、粉末状のものから、液体状のものまでが棚の中に色々と並んでいて、まさに壮観だった。

「お名前をお願いします」

子供にかけるような優しい声色で、椅子に腰掛けた壮年の男性医師が問いかけてきた。私は出来るだけ子供っぽく聞こえるように、「おやふねあずきですっ！」とハキハキ答える。男性医師は微笑んでから軽く頷くと、私をベッドに寝かせた。

気付くと、周囲に男性医師の助手のような若い大人が何人が立っている。

「これから、少しだけ眠ってもらいます。『催眠状態』といって、そうしておくとか開発がしやすくなるんだよ」

男性医師の言うことに、私は静かに頷いた。確か、開発というのは『パーソナルリアリティ自分だけの現実』を確立とかそういう話だったはずだ。それなら、催眠——いわゆるトランス状態の方が開発は効率的に進むだろう。というか、異議を唱えても仕方ないよね、この状況。

そんな訳で私は目を瞑って体を預ける。首筋に何かひんやりした円形のものが押し当てられたが、麻酔の類だろうと思って身じろぎもしない。

しばらくそうしていると、私は段々考えることができなくなっていくた……。

目覚めると、目の前に木原数多が居た。お前なんで此処に、と言う間もなく木原は、

『おめでとお！ 流石じゃねえか小豆ちゃあん！ めでたく超能力者（レベル5）の序列第三位に就任だってよお！ これからは飛び級で常盤台中学に入学だあ！ ひやはは！ こいつは前代未聞だぜえ！——』

とりあえず刺青まみれの顔面から少しでも離れたくて首を横に向けると、そこには何故か普通にビリビリしてる常盤台の制服姿な御坂がいた。御坂のビリビリに唖然としている私に構わず、御坂は俺の顔面に鼻面を近づけて、

『な、なあんですってえ！ この私を差し置いて第三位ってどういうことよ！ 勝負しなさい勝負！』

な、何が、一体どうなって……っていかそそもこの時代じゃ御坂はまだ学園都市にも来ていないはず……？ とりあえずベッドの上で後ずさりすると、御坂に隠れていて見えなかった少年の姿が……お、お前は……！

『へえ、親船小豆っつーんだ。超能力者（レベル5）でお嬢様つてすげーなー、ん？ 俺？ 上条当麻』
『インデックスっていうんだよ！』

か、上条さん！ とういか何でインデックスまでいるのさ！？
明らかにおかしいよね！？ 両方とも私の記憶の中にある姿そのま
まなんだけど！？

本格的にパニックに陥っていると、いつの間にか病室の中じゃなく路地裏の脇に私は転がっていた。

此処はどこだろうと首を振ってあたりを確認していると、ビルの陰から白い頭髮の少年がのそりと歩いてやってきていた。……黒地に白の模様のTシャツ、首元にチョーカーこそないが、紛れもなく
『今』いたらおかしい姿の一方通行だった。
アクセラレータ

『あはぎゃは！ テメエが新しく出てきた第三位かア……？ いいぜエ、愉快的なオブジェクトにしてヤンよオ！』

いやアアあああ！！ オブジェクト違っウウっウっウっ！！
もう何もかも分からなくなって混乱していると、私の視点だったはずなのに視界は急にフェードアウトして、どこかのビルの内部が映される。

ビルの内部には巨大なビーカーのようなものがあり、その中にはオレンジ色の液体とさかさまになって浮かんだ長い銀髪の人間の姿が。

『……親船小豆……。面白い、プランに支障はないから一応泳がせておきましょう……。』

ど、どこからツッコめばいいっていうのさ……。ツツ！！！

「ひいい、いやああああっ！?!?!?」

そこまで来て、私は絶叫をあげながら目を覚ました。

……恐ろしい夢を見た。

いや、本当に恐ろしい夢を見た。っていうか何さあの夢。時系列がおかしいし木原が妙にフレンドリーだし、美琴が妙に喧嘩っ早いし、上条さんやインデックスがここにいる意味が分からないし、何故か一方通行に喧嘩売られてるし、オブジェクトは作品違うし、アレイスターは何か考えてるようで実はすっごい無用心な思考回路だし。……ホント、疲れる夢だった……。

「だ、大丈夫かい？ 催眠が解けた瞬間叫びだしたけど……」

「あ、いや、すみません。嫌な夢を見たので、思わず……」

……ってマズイ。気が動転してたからつい小学生にあるまじき受け答えをしちゃった……。

「（い、『嫌な』夢か……。催眠剤の機能が不完全だったのか？でも一応能力には目覚めているみたいだし……）」

医師さんは私の顔を見ながらぶつぶつ呟いているが、寝起きなので良く分からない。とりあえず疑われてはいないようで安心だ。

「まあ、何にしても能力開発は終了したよ。これが資料だ。……君の能力は結構特殊なモノだから、別途で名称を考えてもらうことになるかもしれない。……名称は個人名義のものだから、基本的に後で気に入らなくなれば変更も可能だよ。ただし、外部の企業の技術開発に協力した場合、そのときに使った名称は以降正式名称になつて変更できなくなるから気をつけてね。ここで一回能力のテストをするから、その能力の効力とかから名称を考えてね」

矢継ぎ早で繰り出される医師さんの指示に、私はただ頷いた。……これでも一応前世は大人だったんだから、このくらいの長話は一回で理解できる。要するに、ここで一つ黒歴史を作れ、ってことでしょ？ まあ原作でも恥ずかしいなあと思うネーミングはあるから気にしないよ。

そんな風に自分で言い訳しながら、私はとりあえず右手を前方に翳してみる。すると、ピシリ、と音を立てて手の先に黒い亀裂が走った。

……ええと、これが私の能力？ っていうか演算とかそういう細かいこと、今一切考えなかったんだけど……、超能力ってこんなものなのかな。

「まずは説明から。検査の結果、親船さんの能力は『低能力（レベ

ル1)の瞬間移動系能力』ということが判明したんだ。原理としては、一次元上の座標に意図的な齟齬を発生させ、そのときの誤差で本来存在することの無い次元の裂け目を発生させる、だったかな……。ごめんね、手元の資料に似たような能力の情報が無いから、急遽研究所の解析班の人たちに調べてもらってるので詳しいことは分からないんだけど」

医師さんが申し訳なさそうに苦笑いする。……へえ、次元の裂け目、ね。要するに……なんだっけ、名前は忘れたけどスキマ？を作る妖怪のアレみたいな能力かな。

四次元ポケット的な使い方ができるんなら、結構有用な能力だな。本当に低能力(レベル1)でいいの？ そんな風に考えていると、医師さんは私の目を見て口を開いた。

「どうやら、親船さんは頭がいいみたいだね。何か質問でもあるのかな？」

……ん、ちょっと不審に思われたりしてるのかな？ ここは一つ子供っぽく……、

「せんせい、この穴の中ってどうなってるの？」

私はなるだけかわいらしく映るように小首をかしげて問いかけてみた。……ちよつとあざとい気もするけど、自分でやってて正直キモいけど、問題はないはず。

そもそもこの世界の幼女は皆が皆今の私のように庇護欲をそそる振る舞いをデフォでするからね。

「ここかい？ ここは……私たちもよく分かっている場所なんだ。ただ、能力で作られたからか高濃度の拡散力場が検出されているん

だよ。……ああ、拡散力場、っていうのはね、能力を持った人たちが自然に発してる小さな『力』なんだ。両掌をすごく近づけてみてるかな？ どうだい？ 少しだけど、熱気が感じられるだろう？ それと同じように、能力を持った人たちは普通の人には分からないくらい小さな力を出しているんだよ」

なるほどー、と上手く話をはぐらかされたフリをして私は両掌を近づけたまま頷いた。……要するに、わけの分からない空間ってことね。次元の裂け目とか言ってたし、そうなるか。

んー……、何だか不思議な能力。でも、能力開発で得た能力なら妙なものではないよね、うん。

「質問はこれで終わりかな？ なら、次の人と交代してくれる？」

「はい！」

「病室を出た後は、すぐ隣の部屋に行って能力名を考えてねー！ 能力名の記入は専用の機械があるから、それを使ってね。分からないことがあれば担当の先生に聞くんだよ！」

「はい！」

とりあえず元気に返事しておき、意気揚々と外に出て行く。正直念動力じゃないのは残念だけど、四次元ポケットといえど生前一番欲しい秘密道具の一つだった。いつでもどこでもゴミ箱が作り出せる程度の能力……。…………ヤバイ、便利かも。正直もう強度アップしなくて良いや。

そんな風に考えて、私は意気揚々と病室から出て行った。

病室から出た後は、とりあえず先生に言われたとおり、隣の部屋に入っていた。

部屋の中は塾か何かの自習室のようになっていて、机と椅子があ

り、机の上にはi - padみたいな物が置いてあった。机と机には仕切りがあつて、隣の机の様子は見えない。

部屋を見渡す限り、この場所にいるのは私ともう一人の教員（研究員？）だけらしい。それはそれで恥ずかしいな、と思いつつ、私は席に着いてi - padみたいな携帯端末を起動した。

起動するなり、携帯端末の画面は真っ白になり、何かの資料の記入画面となった。

一番最初に目に付いたのは『氏名』『性別』『年齢』『所属』の欄だが、そこには既にそれぞれ『親船 小豆』『女』『六』『七里が丘小学校 一年二組 六番』と記入されていた。

その下に『能力名』『能力詳細』と書かれた欄があつたが、ここには何も記入されていない。『能力詳細』に至っては斜線が引かれて『後日記入』と書かれている始末だ。

本当に能力名を書けば良いんだな、と思いつつ、私はどんな能力名がいいか考えてみた。

何気に隣に『研究者お勧めの能力名！』と書かれて、『次元断層』とか『空間亀裂』とか書いてあつたけど無視した。やっぱり能力名は自分でつけたいのだ。

とりあえず、『ホール』が入るのは決定事項。だって穴だし。穴といえばホールだ。それくらいしか英語の語彙がないというのもあるけど。

じゃあ、ホールに何かを組み合わせでよさげな造語を……、『ブラックホール』？……それは何だか重力系能力につきそうな名前だ。シャドウホール、デイメンションホール、スキマホール……。うーん、駄目。しっくりこない。

……これはもうアレだね、適当に考えよう。真面目に考えても後で黒歴史になりそうだし、そのとき『あ、これ適当だし（笑）』って逃げ道があつたほうが精神的に楽。

じゃあ、そうだね。能力がよくわかんないので、よくわかんないつながりから垣根の未元物質ダイクマターからとってダークホールというのはどうかな？ よし、こんな感じで。てきとーに決定！

次に漢字だけど……これも適当に決めよう。割って、裂いて出来る、……穴？ 洞穴？ ……穴って単語は入れたくないね。じゃあ、空洞？ まあこれで良いかな。割裂空洞、と書いてダークホール。うん、こんな感じで良いや。てきとーに決定！

………言っておくけど、これは適当。適当なんだ。うん、適当。だからネーミングがかっこ悪くても私の実際のネーミングセンスがかっこ悪いわけじゃないし。私は真面目に考えてないからね。だから後で恥ずかしくなっても私の所為じゃないんだから問題ない。私の実際のネーミングセンスじゃないんだから。うんうん。

……よし、それじゃあ提出しよう。

「せんせー！ できましたー！」

「はい、はい。どれ、かな？」

私の声に反応してやって来たのは、枯れ木のような先生だった。言葉もたどたどしく、私でも突けばへし折れてしまえそうな人だ。先生はふむふむと頷きながら私のつけた能力名を見て微笑んでいた。………何だか恥ずかしい。やばい、顔が赤くなってきた気がするよ……。

「分かり、ました。では、一番、下の、『決定』、ボタン、を押して、くださゲフウッ！」

「せんせエエえ——っ！」

途中で咳き込んだ先生に私は思わず叫んでしまった。大丈夫だろうかこの人。今日を無事に生きられるのかな……？

「ゴフツ、大、丈夫。私には、守るべき、人が、いるから……。この情報を、提出、する、までは、君を置いて、逝きは、しない……！ 情報を、提出、しおえ、たら……戻ってくる。それ、までは……待つて、いて、ほしい……」

枯木先生（仮名）はそう言うと、弱弱しい瞳に精一杯の力を込めて微笑んだ。ああ、ああ……、この人、なんでこんな無駄に死亡フラグ建てちゃうんだろう。これは死ぬ、絶対に死ぬ。駄目だ、いくなー！

しかし、そんな私の心の声も空しく、先生は虚空に溶けてなくなるように廊下に出て行った。

……さて、暇になった。先生が能力名を上に出すまで……。一〇分くらいだろうか？ その間、何をしようか……。そうだ。このi-padみたいな携帯端末、i-padみたいなんだから何かしらのアプリがあるかもしれない。それを使って遊んでみよう。

そう考え、携帯端末に触れた瞬間だった。ブザー！ と携帯端末の画面が真っ暗になり、そのまま操作を受け付けなくなる。

「え！？ え、え、え、ど、どうしよう……」

もしかして、情報送信中に下手に触れたのがまずかったのかな？
と思いつつ、それ以上あれこれ触るわけにも行かなくなってわたししていると、

『じじ、ざざざざ、ざじじじじじ』

携帯端末の画面がノイズまみれになり、ノイズ音も響いてきた。
これは本格的に壊してしまったかな…… と思い、とりあえず先生が
じきに来るだろうから謝ろう、と諦めた。そんな風に考えていると、
携帯端末の画像は少しずつだが明瞭になっていき——『SOUND
ONLY』の文字へと変化した。へ？ と思う間もなく、ノイズ
音もクリアな音声へと変貌した。

『じざざ……聞こえているか？』

その声は、聞き覚えのない声だった。

「え、あ……。はい」

とりあえず返事してみたものの、頭が現実を追いついていなかったのは否めない。だって、当然だと思う。能力名の提出用機器のアプリを探そうと思ったなら急に機械が壊れて、そこから正体不明の人間の声が聞こえたのだから。

『そうか』

人間は短く呟いた。なんというか……何とも表現しがたい声だ。男の人にしては柔らかすぎるし、女の人にしては硬すぎる。子供にしては落ち着きすぎているし、老人にしては若々しすぎる。聖人にしては言葉に力が足りないし、罪人にしては自信に満ち溢れている。そんな……、いつそのこと、宇宙人とても表現してしまえそうな声だった。まあ、かといって宇宙人にしては親しみやすい声なんだけど。

『まずは自己紹介でもしようか。私の名前は「アレイスター」クロウリー」。君も親船最中の孫ならば知っているだろうが……、学園都市のトップ、統括理事会の理事長、とでも言えば良いだろうか？』
「え？ えっと……？」

とうかつりじかい？ りじちょう？ ……どういう意味？

『……フム。どうやら理解はしてもらえたようだ』

え、ちよつと待つて！ アレイスターって、統括理事長ってこと！？ いや、何で？ だってあの人って、黒幕で、窓のないビルにいて、いくら私がお祖母ちゃんの孫だからって話しかけられるような存在じゃないでしょ？

しかも、あれ？ どうして……、え？ いやだって、私……能力開発して、その名前を考えて……どうしてアレイスターに話しかけられてるの？

『いや、何。統括理事会役員の孫娘様のご入学だ。私としても、入学祝の品を送らないわけにはいかない、と思つてね』

そこら中にはてなマークを飛ばしている私をよそに、アレイスタ

「はどんな話を進めていく。というか、入学祝？ アレイスターって意外と優しいんだね。原作で悪巧みばかりしてるから悪い人だとばかり思ってたけど。」

『そうだな……。入学祝には、「暗部組織との鬼ごっこ」などが良いと思っていてね。楽しんでくれると嬉しいのだが……。』

「……え？」

あんぶそしきとの、おにごっこ？ それって、どういういみ？

『せっかくだから、鬼役の暗部組織には数十の精鋭を集めさせてもらった。みな、暗殺の天才たちばかりだ』

「……？？」 この人の言ってることが、よく分からない。えっと、私とたくさんの暗部の人で鬼ごっこをしろって？ それって楽しいの？ 暗殺の天才って、どうして鬼ごっこに暗殺の才能が必要になるの？

『流石に、まだ能力者の暗部人員は用意できなかったが、どれも屈強な肉体と卓越した技術の持ち主だ。この街の科学技術も投入してある。どうかね、気に入ってくれたかな？』

「ごめんなさい、暗部って、何ですか？」

『……ああ、すまない。説明が足りなかったな。「暗部」というのは、この街の邪魔者を消し去ってくれるえらい人たちだよ。まあ、有体に言えば人殺しだがね』

「……ええと、私は、アレイスターの話によると、これから暗部の人と鬼ごっこをするってことなんだよね？ それって……、

「捕まったら、どうなる、の……？」

『…………？死ぬが』

アレイスターは、当然のことを答えるように軽々しくそう言った。
…………あれ？私はこれから、たくさんの『暗部』の人と命が
けの鬼ごっこをして、捕まったら殺される、ってこと？…………それ
って、えっと…………。…………もしかしくなくても、私って、死ぬよね？
…………、あれ？

『死ぬよ。一人寂しく、誰にも見取られないまま。肉親が見ても、
誰か分からないレベルの肉片となって、孤独に、空しく、凍えるよ
うな恐怖に苛まれながら』

そうか、今私、アレイスターと話してるんだ。統括理事会の理事
長で、『禁書』の物語の黒幕で、私なんか及びもつかないくらい頭
が良くて、それでいてとっても残酷で、人を殺すのをなんとも思っ
てない人に、『今から殺しに行くよ』って言われてるみたいなもの
なんだ。

…………、…………、…………。

…………あは。

「へ、はは、あはははは…………」

気がつけば、私は椅子から転げ落ちていた。どのタイミングで転
げ落ちたかなんて覚えていなかった。落ちた拍子にどこかに頭をぶ
つけたのか、ずきずきと頭が痛んだがそれすら気にならない。立ち
上がろうと思ったけど、体の中に芯が通ってないみたいで立ち上が
れない。

手に力を入れては震えてすべり、手に力を入れてはふるえてすべ

り、てにちからをいれてはふるえてすべり、すべりすべりすべりア
アアアアああああああああああああ！！！！

『親船小豆、親船小豆』

「ひ、いいああ！！」

私は、全く力の入らない腕で必死に地面を掴んでもがいた。ここにいては駄目だ。ここにいたら死んでしまう。ここにいたら捕まってしまう。

そんな思いばかりが、私の中で渦巻いていた。

『親船小豆、……親船小豆？』

「ひ、あ、」

怖い。その思いで、腕も動かなくなってしまった。その場に丸まって、必死に耳をふさいで声を無視しようとする。それでも、不思議とよく通る携帯端末の音声は私の鼓膜を振るわせた。

『聞こえなかったか？ どうやら動揺しているようだから要点を掻い摘んでもう一度言わせてもらうが、』

。

！！

『——宣戦布告だ。これから、数十の暗部組織が君の命を狙うだろう。……それと、入学おめでとう』

……それからの十数分間は、正直記憶に残ってない。

05（前書き）

何となくグロ注意かもしれません

「ぐ、ごえ……げええええっ!!」

自分が吐いてる音で我に帰る。吐き終えて、口をぬぐってから私は周囲を見渡した。此処は……さっき私がいた病院の裏庭らしい。どうやら、私は裏の溝に吐いていたようだ。でも、何でいきなり吐いたりなんかしたんだろう？

おっと、私の手元には、i-padみたいな形状の機械が――、

――!!

思い、出した。

私は……暗部に、殺されるって言われて、怖くて、逃げて、でも何もないのも怖くて……。それで、これを持って来たんだ。

『……フム。私に案内役でも期待したのかな？ まあ、それもまた面白くはある、か』

機械の中のアレイスターは、私の怯えている様子でも見えているのか、心底楽しそうな声色で言葉を紡いでいく。

「……どうして」

私は、言葉を続けようとするアレイスターを遮って呟いた。

「どうして、私なの？ 統括理事会の子供なら他にいくらでもいたでしょ？ 素甘おばちゃんだって、お父さんもお母さんも!! 親船の人間じゃなくなつて良い。他に狙える人なんていくらでもいたでしょ!？ どうして私なの!？ こんな、こんなの、こんなのっ

て……!!」

だからと言って、素甘叔母ちゃんやお父さんやお母さん、他の人を狙え、という訳じゃないけど。でも、他に選択肢があったはずなのに、よりによって何で私が狙われなくちゃいけないのか、それがただ理不尽に思えた。

『……フム、いくら「アレ」があつたとしても、子供は子供か……』

アレイスターは、そんな風に取り乱している私に興味深そうな様子で何かを呟いていた。その様子が、私のことを実験動物か何かにか見ていないように思えて、余計に苛立ちを感じた。そのことを糾弾してやろうとしたとき、アレイスターはそれを遮るように言葉を続けた。

『まあ、簡単に言う君という異分子イレギュラーを私が許容できなかった、というだけの話だ。残念ながら私の「プラン」の駒は現時点で完成しててね、これ以上君のような特異な能力者に現れてもらっても困るんだよ』

……特異な、能力？ イレギュラー？ 意味が分からない。でも、アレイスターは私の沈黙を別の意味で捉えたのか、またも興味深そうな様子で息をついた。

『……フム。確かに、初心者ヒキナーになんのハンディキャップもないのは大人気ないというものだ。それでは、出血大サービス、という奴で一つだけヒントをあげよう』

アレイスターは鼻歌でも歌いそうな調子で、

『一つ目の刺客は銃撃部隊。主に暗殺に秀でた部隊だ。遠距離からの銃撃に気をつけることdddバギツ!』

ガン! という音に、アレイスターの最後の言葉はかき消された。私の手から離れた機器が、からからと乾いた音を立ててコンクリートの地面を転がった。直前の話からして、銃撃。それも、私を狙ったものだ。

「……………ッッ!」

私は思わず息を呑み、衝撃で痺れた右手を左手で押さえる。とりあえずどこから狙われているか分からないから、身をかがめて走り出した。

後から考えたら、ダークホール割裂空洞を頭上に連続で展開しながら逃げれば比較的安全に逃走できたんだろうけど、そのときの私にそんなことを考える余裕なんてなくて。

そして、そんな私を見逃してくれるほど、暗部の人間が人情味あふれる精神を持つてゐるはずもなかった。

ズガン! という音が響いた。私は一瞬、何の音なのかよく分からなかったんだけど、ぼしゃっ、という音と同時に私の頬にあたたかいものがかったのは分かった。それでも足を止めるのが怖くて、二、三步走ったところで急にわけも分からずよろめいた。よろめいて、左脚に力を入れたところで左肩から激痛が走り、そこでやっと私は自分に何が起きているのか気が付いた。

……左腕が、とれそうだ。

比喻じゃない。感覚がなくなっていて、ぷらぷらと力なくゆれているのが分かる。あまりにも痛すぎて、もう何がなんだか分からないくらい。———いたい、いたい、いたい、いたい、いたい、いた

い、いたいいたい！！！！

私は耐え切れなくなつて左腕を庇うように右肩から転がった。同時に、私の頭のすぐ横に銃弾が命中した。多分、転がってなかったら左肩のど真ん中に命中していただろう位置だ。あたっていたら、今度こそ左腕が取れていた。でも、私はかわせたことに幸運を感じるよりも先に、腕がとれていただろう未来に恐怖を感じた。

もう何がなんだか分からなくなつた私は、とりあえずこれ以上この場所に居たら死ぬ、という思いでなりふり構わずとなりにあつた窓ガラスに飛び込んだ。飛び込んだ拍子にガラスが割れ、破片が体中に突き刺さつたけど、もうそんなことは気にならなかつた。

部屋の中は無人だつた。この際人が居てくれたほうがよっぽど良かったんだけど、贅沢は言えない。いくつか並んでいるデスクの影まで這うようにして移動し、そこで身をかがめて丸くなつた。腕が取れてもいい、足が取れてもいい、ただ、お祖母ちゃんに、優しい人に会いたい。私を突き動かす感情はそれだけだつた。

なんでこんなことになつてるの？ 私が何をしたの？ 私はただ、普通の小学生として普通の生活を送ろうとしてただけなのに。分からない、分からないよ。どうしてこんなことになつてるのか。

震える右手を左肩から離し、懷から携帯を取り出した。血にまみれて真つ赤な右手で触れてしまったから、小学生にしては少し大人っぽいデザインの携帯も真つ赤に染まつてしまった。しかし、そんなことは少しも気に留めず、私は何かに取り付かれたように携帯を操作し、電話帳からお祖母ちゃんの名前を見つけ出す。

ぶるる、という音声が無人の室内に響く。心の中でお祖母ちゃん助けてと何度も祈っていると、やがてぷつっと呼び出し音が途切れ、

待ち望んだ声が私の耳に届いた。

『もしもし？ 小豆ちゃんですか？ 能力はどうになりました？』

お祖母ちゃんのいつもと変わらない声を聴いた瞬間、私は自分が日常の世界に戻ってこれたような気がして、全力で安心した。――そして、心の支えが出来たことで溜めこんできた感情が一気に爆発した。

「う、う、う、う……！！ お、祖母ちゃん……」

『……！？ どうしました？ もしかして、能力が目覚めなかった、とかですか？』

違っよ、お祖母ちゃん。

私、ちゃんと能力は目覚めたんだよ。でもね、痛いんだよ、肩が痛いんだ。血がたくさん出て段々寒くなってくるんだ。……私、死んじやうのかなあ？

……死にたく、ない。まだやりたいこと、たくさんあるもん。お祖母ちゃんにお小遣いもらって欲しいもの買ったり。小学校で友達をたくさん作ったり。多分私は回りに比べて大人びてるから、みんなのまとめ役になってみたりして。あと、お母さんとお父さんの駄目親っぷりも矯正してあげないと。……妹とか弟も、欲しいなあ。

ほら、やりたいことなんて、たくさんある。……こんなところで終わるなんて、やだよ。

「お、祖母ちゃん……死に、たくな、いよお……助けてよ、お……」

side 最中

その声を聞いた瞬間、頭の中が真っ白になった。

様々な情報、憶測が脳内を駆け巡る。一年前の私の統括理事会就任、中々来なかった小豆ちゃんからの連絡、涙声、死にたくないという意思――。

――命を狙われているのは確定。おそらく負傷もしている。ならば、誰に？ 統括理事会である私に牙を剥くのと同義である行為を許容できるのは、同格である統括理事会の中でも数名――いや、外交関係に強い私に対抗できる理事は、一人としていない。徒党を組んでも厳しいでしょう。

私は即座に手元にある携帯機器を操作して各理事の動きを見る。

……が、当然のようにそこには手がかりとなるものは記録されていない。少しばかり汚い手を使って裏の情報も洗ってみたがこれも同じ。

………一体、誰が小豆ちゃんの命を？

そこまで考えて、我に返る。

……私は、何を勘違いしていたんでしょう。今行すべきは小豆ちゃんの命を狙った犯人の捜索ではなく、一人恐怖に震えている私の孫娘の救出です。

「小豆ちゃん。今は病院ですね？ いや、答えなくても分かります。今すぐ迎えに行きますから、とりあえず止血をして待っていてください。」

大丈夫、絶対にあなたを死なせたりしません。安心して、落ち着いて、決してそこから動かず待っていてください」

とりあえず、彼女を落ち着けなくてはならない。今、小豆ちゃんは今までで最もパニックの極地に陥っていることでしょう。であれば、不用意に彼女の精神を刺激してしまったら、いくら前世の分精神が円熟しているとはいえパニックになって予想外の行動をとらないとも言いきれません。それでは、救えるものも救えなくなってしまう。

携帯で小豆ちゃんとの通話を保ったまま、私は左手に持った端末で部下に病院周辺の警護を固めるよう指示を送る。……冥土帰しもすぐに召喚できるよう準備を整えておく。小豆ちゃんがもしも大怪我をしていたら、彼に完全に、そう完全に治してもらわなくてはなりません。

同時に、アンチスキル警備員にも連絡。幸い、病院内にということですから、比較的保護も早く進みます。……しかし、小豆ちゃんの確保は私が、直々にしなくては。彼女は恐らく今、疑心暗鬼に陥っているはず。見ず知らずの人間はおるか、肉親以外は『敵では？』という思考がちらついてしまい安心することも出来ないでしょう。

「大丈夫、落ち着いて、冷静になって考えてみてください。私は統

括理事会の役員です。私に任せておけば、」

『……無理だよ!!』

落ち着かせる為の言葉に、小豆ちゃんは耐え切れなくなったように悲鳴を上げた。……あまりのことに、少しだけ呆然としてしまいますが、すぐに持ち直して問いかけます。

「何が『無理』のですか？」

『だって、だって、アレキスターがつ、理事長が、ううう、殺すって、入学祝で、へっどはんたーでっ、能力がプランに邪魔だつて!!』

混乱しているのでしょう、単語の羅列ばかりで全く要領を得ない言葉ですが……私には伝わってしまいました。……統括理事長、アレキスター＝クロウリーが、直々に小豆ちゃんとコンタクトを取った？

……なるほど、そう考えれば確かに辻褄は合います。

私をはるかに越える権限を持つ統括理事長であれば、私を通さず勝手に公式決定として小豆ちゃんを襲うことも出来ます。ただの統括理事会役員である私がいるから大丈夫だといっても、小豆ちゃんにとっては安心できる材料にすらならない、と。なるほど……。ふむ、……。

私は、静かにこちらからの音声入力を切ります。小豆ちゃんが不安そうな声でこちらに呼びかけてきますが、流石にこれから吐く言葉は彼女の不安をあおる結果にしかならないでしょう。

「——アレイスタアアアアアアああああああああああ
ああああああああッッッッ！！！！」

ガン！ と私は壁を殴りつけた。拳が裂け、血が壁にこびりつく
がそんなことは気にしていられなかった。

……！ 謀ってくれたな……、謀ってくれたなアレイスター！！
能力がプランに邪魔？ 確かプランには一方通行アクセラレータが関係していた
はず。小豆ちゃんの能力が何であろうと関係するはずが無い！ ま
して、小豆ちゃんは温厚な性格の持ち主。下手に触れなければ無害
極まりない存在。そこにわざわざ触れる必要などあるはずない。

牽制。そうに違いありません。

私は統括理事会に就任する前から『子供の権利回復』や『学園都
市の軍事行動への介入の反対』を謳ってきました。そのせいで上層
部からはいいようには見られず、数年ほど統括理事会役員就任が長
引きでしたが、結局は就任しました。

本当ならもつともめると思っていたのにわりとすんなり就任でき
たことに違和感を感じてはいましたが、まさかこう出るとは……！
私から、完全に牙を抜いてただの駒にしよう、そう考えているの
でしょう。アレイスター！クロウリーは。

ただ、それは『牙』じゃなくて『逆鱗』だぞ、アレイスター。

「く、ははは」

確かに、私は屈しました。娘の素甘の身が危険に晒された時、彼
女が傷つくのをおそれて雌伏しました。もつと穩便に、私の『大切
なモノ』を脅かす存在の監視をかくぐり、この『交渉』の腕前を
生かして戦うと決めました。そうすることで、『大切なモノ』を守

ることが出来る、そう信じて一切の武力を捨て、ギリギリのラインを切り抜けてきたんです。

……何を愚かな勘違いをしていたんでしょう。それは、守っているんじゃない。戦っている？ そんなはずもないでしょう。

そうというのは、『ナメられている』、ということです。

私は馬鹿でした。

そうです。当然でしょう。今まで散々媚び諂っていたのですから、ちよつと脅せば簡単に牙を折ると見下されていても当然じゃないですか。

……分かせてあげないといけませんね。私を敵に回す、というのがどういふことなのか。『日和見な侵略者^{ピースメイカー}』と呼ばれた親船最中を敵に回したら、学園都市がどうなってしまうのか。

「……これは、警告だ」

side other

親船小豆が襲撃を受けてから三分後。

ネット上に統括理事会の中でも特に発言力を持っていた『木下鈴未^{すみ}』氏の汚職の証拠が流出した。犯行の手口が秀逸だったこと、それから『たまたま偶然同時刻に各支部の警備員^{アンチスキル}が他の仕事に借り出されていた』ために初動が後れたため、犯人の特定はできず。

結局事件は迷宮入りとなり、木下鈴未は失脚、彼の担当していた内政部門では混乱がおき、学園都市は半年ほど騒然となった。また、この半年間には大小さまざまな役職の人間の汚職が発覚し、学園都市内での上層部への不信感が高まり、上層部の権威低下が進むことになる。しかし、それとは対照に『学園都市の子供たちの権利回復』を謳っていた親船最中だけは、上層部の中でも民衆の信頼を獲得し、発言権を増していたという。

余談だが、彼の子飼いの暗部組織には『銃撃部隊^{ヘッドハンター}』というものがあり、この組織の存在もネット上に流出した『汚職の証拠』として流され、情報の流出から一時間後に組織行動不能に、一日後に全員が拿捕されることとなった。

この手際のよさは警備員^{アンチスキル}の木下氏の汚職情報流出に対する初動の遅さと比較するとありえないほどに素早く、第三者の情報流出^{リーク}を装った警備員^{アンチスキル}の自作自演だったのではないか、という見方も出たが、数週間もする頃には忘れられた。

side 小豆

私は作業用デスクの椅子をしまえる部分に座り込んで、小さくな
つてお祖母ちゃんの到着を待っていた。

電話先にいるはずのお祖母ちゃんは、まだ何も返事してくれない。
お祖母ちゃん、私のことキライになっちゃったのかな……。せつか
く慰めてくれたのに私が怒鳴ったりしたから……。それで私のこと
嫌になっちゃったのかな……。

「ごめんなさいお祖母ちゃん……」

嫌われたくなくて、電話口にはそぼそと声をかける。でも、お祖
母ちゃんは答えてくれない。悲しくなつて、泣き止んだはずなのに
鼻の奥がつん、と痛くなった。

「うつ……ぐす、ひぐつ……」

視界がぼやけてきて、自分が泣いていることに気が付いてすぐに
目元を拭った。それでも、涙は止まってくれない。悲しくて怖くて
絶望で仕方がなかった。こんな状況で、お祖母ちゃんにまで嫌われ
たら、私一体どうなるの？

「……怖い」

ボソリ、と沸いてきた感情が口をついて出た。怖い、よ。お祖母ちゃんに見捨てられたら、私は何もできない。きつと、何も出来ずに殺されちゃう。死にたくないよ、まだ生きてたいよ。痛いのは嫌、怖いのも嫌、嫌嫌嫌！！

「うう……、お祖母ちゃん……、お祖母ちゃん……」

そう、呟くことしかできない。呟いていないと、きつと私の大事な何かが折れてしまうから。

「お祖母ちゃん……」

この呟きにだつて、意味は無い。ただ、そう呼んでないと私を私たらしめる大事なモノが壊れてしまうから、呟いているだけ。

「……、」

と、その時唐突に、ギイ、と扉が開く音が聞こえた。

「！」

私は、思わず飛び上がりそうになった。お祖母ちゃんが、私を助けに来てくれたんだ！！ やっぱお祖母ちゃんは私のことを見捨てた訳じゃ、

「クソツタレ！！」

喜びに打ち震えていた私は、その粗暴な声に思わず縮こまってしまった。……お祖母ちゃんじゃ、ない？ じゃあ、お祖母ちゃんの部下？ でも、じゃあなんでこんなに乱暴な……？

「だから、こんなことやめようって言ったんだ！ 『親船最中』の孫娘を襲うなんて、馬鹿げている！ 隊長も捕まっちゃったし……クソが、なんなんだよ、あの警備員ども！ こっちの武装も戦法も、何もかもリークされちゃってる…… どう考えても親船の陰謀だ！！」

切羽詰ったような男の声に、今度こそ私の呼吸は止まった。……敵だ。ヘッドハンターだ。私を殺しにきたんだ！！

「こうなったら、親船小豆を直接ひっ捕らえて人質にするしかねえ……。クソツタレ、どこ行きやがったあのガキ！！」

だ、駄目だ。動いたり、声を出したりしたら駄目だ、殺されちゃう。やだ、やだやだやだ死にたくない、こんなところで終わりたくない、お祖母ちゃん早く来て！！

ドス、ドス、ドス、と、重装備のせいかな重たい足音がこっちに近づいてくる。小学生だからか、体躯の小さい私はデスクの中に椅子と一緒に収納できるほど小さい。だから、もしかしたら椅子の陰に隠れて見つからないかもしれない。

（お願いだから、通り過ぎて、私に気付かないで……！）

祈るような気持ちで……というか、確かに祈っていると、男の声が聞こえた。

「！ ……ふっ、くく、くく、そっかあ、そうだよなあ。所詮小生だ。そこまで気がまわるわけがない、か」

男の足音が、少しずつ近づいてくる。

「なあ、親船小豆ちゃん？ 上手く隠れてるみたいだが……、でも一つ忘れてることがあるぞ？ …… テメエ、ガラスまみれの血まみれだっただろうが。そんな状態でのた打ち回ったら、どんなバカだろうと居場所には気付いちまうよなあ？」

！……！

そんな、やだ、じゃあ、わたし、みつかつてる？ …… いや、こないで、こわい、いや、しにたくない、いや、いや……！！

ガン！！ と私の隣のデスクが蹴飛ばされた。

「こつちかあ！？ …… おっと、こつちのデスクじゃなかったみたいだなあ」

ここで気絶できたら、どんなに良かっただろう。でも、私の精神は思ったより強かったみたいで、この状況でも目はぱっちり開いて閉じることすらできない。

「それじゃあ——」

ガラ、と私のすぐ隣に置いてあった椅子が動く。どうやら、背もたれを掴んで動かしているらしい。

「——ハアッ！ ハアッ！ ハアッ！ ハアッ！」

いつの間にか、私は息を潜めるのも忘れて浅く早い呼吸を続けていた。恐怖と焦燥で、私は何も考えられない。ただ、『しにたくない』という文字が延々と頭の中を巡っていた。目覚めたばかりの能

力など、既に頭の中になかった。立ち向かうことなど、思いつきさえしなかった。

「——小豆ちゃあん、見つけたあ！」

椅子を外に出し終えた男は、身をかがめて私の頭の高さまで視線を合わせると、そのギョロリとした目を動かして私と目を合わせてそう言った。

「あつ——」

side other

「——撃てえッ!!」

野太い男の声が響いたと思った瞬間、ボバツ!! という爆音がそれを塗りつぶした。それだけで、親船最中の視線の先に突っ立っていた男はノーバウンドで数メートルも吹っ飛び、壁に打ち付けられる。男の右肩から先に腕はなく、代わりに血のアーチが伸びていた。

—— なんとか、間に合った。と親船最中に同行していた警備員アンチスキルの面々は誰からともなく思った。彼らに、今回の事件の仔細は分からない。しかし、この親船最中という老女の孫娘が何者かに襲われている、という事実だけは聞いていた。彼らが動き出す理由など、それだけで十分だった。

「ぐ、がえ、ごお……ッ!?!?」

男は、圧倒的有利な状況からどうして自分がこうなっているのか理解できずにのた打ち回る。そんな状況で、最中は哀れな男には一瞥もくれずに室内に入った。

「あ、親船さん……！ 此処は危ないです！ まだ敵の残党が残っているかも……、」
「その程度の危険度より、一刻も早い小豆ちゃんの救出の方が先決です」

すたすたと足早に歩く最中。最中に同行していた警備員アンチスキルの特殊部隊の制止も振り切って先ほど男が立っていたところまで辿り着くと、そこでゆっくりと屈み込んだ。

「……………」

本来なら。彼らのマニュアル通りに事を運ぶのであれば、全く無駄な行動。しかし、此処にいたるまでのあの老婆の表情を知っていた彼らに最中の行動を止める事はできなかった。

「…… ああ、小豆ちゃん……。こんなになって……痛かったでしょう？ 苦しかったでしょう？ ごめんなさい……。こんなになるま

で助けてあげることが出来なかった私に言える義理はありませんが……もう、大丈夫ですよ。私が、守ってあげます」

そう言つて、再び立ち上がった最中の腕の中には、今にも右腕の取れそうな、血まみれの幼い少女の姿があつた。

「……ッ！」

最中に同行していた警備員アンチスキルのうちの一人は、言葉にならない絶叫を発していた。それは、グロテスクな光景への恐怖などというものからではない。この子がこんなになるまでに助けられなかった自分への憤り、……そして。

「……クソが、なんて安らかな寝顔してやがるんだ………ッッ！」

こんなになるまで痛めつけられ恐ろしい思いをしていたくせに、『祖母に助けてもらった』という彼女にとっては当たり前だと考えていい結末、ただそれだけで、こんなにも安らかな顔を浮かべることが出来る、そんな優しい少女を襲った真の黒幕に対する怒りからだ。

他の警備員アンチスキルも同じだった。

彼らの本質は、どこまでいっても教師である。特殊部隊ということで、普通の警備員アンチスキルよりも荒事に強いが、子供のことを思う気持ちは、通常の警備員アンチスキルと同じくらい——いや、この都市の闇を知っている分通常よりも強いかもしれない。

そんな彼らが、今まさに救いきることのできなかった少女を目の当たりにしているのだ。腕が千切れかけるような重傷を負つて、精神が壊れてもおかしくないほどの恐怖を味わつて、それでもこんな

お粗末な結末で満足できてしまっ、そんな優しい少女の、救われない結末を目の当たりにしているのだ。

「――冥土帰しを呼んで下さい」
ヘヴンキャンセラー

沈痛な静寂が支配する空間に、最中の気丈な声が響き渡った。そこで、警備員たちは我に返った。今ココで、最もこの結末に後悔している人間は、誰だ？ 当然、それはついさっきこの事件に合流した警備員たちではない。最もこの結末に納得していないだろう人間が、親船最中が気丈であろうとしているのだ。自分たちが、ここで膝を折っているわけにはいかない。

「――っ！！ 了解しました！」

返事をしたのは女性の警備員だった。アンチスキル彼女は少しだけ涙ぐんでいたが、その涙を必死に押し殺して無線機に手を伸ばすと、これ以上ないほど迅速に他の部隊と連絡を取っていた。

病院に搬送されてから数時間、最中とその娘夫婦は手術室の前の椅子に座り込んでいた。普段は笑顔が耐えない汁粉は、この時ばかり

りは夫の羊羹の胸に顔を押し当てて咽び泣いていた。羊羹も、それが不可能なことであつたと分かつていても娘の危機に立ち上がれなかつた自分を悔やんでいた。

ワイン、と手術室の扉が開き、その中から中年の小男が出てくる。彼のトレードマークである力エル顔も、今は引き締められ緊張感を醸し出す要素の一つとなっていた。

「……っ！ 先生！ 小豆ちゃんは、小豆ちゃんは！？」

「——彼女の怪我は完治させた。傷の一つさえ残つてはいない。後遺症の類も気にしなくていい。すべては、元通りだ」

「~~~~っ！！ うあ、ああああああああ！！」

噛み締めるように答えた力エル顔の医者言葉の聞いて、汁粉はそのまま泣き崩れた。

「……とはいえ、精神面の問題は別問題、……ですよね？」

「……ああ。——心的外傷後ストレス障害《PTSD》などの症状が出る可能性もある。

少なくとも、ご家族であるあなたがたのフォローが大切になってくるのは間違いない。協力してもらつ場面は多々出てくるだろう」

「……、」

最中の言葉に返すような形で告げられた力エル顔の医者（ヘウンキャン）の診断に、一同は押し黙る。そんな一同を一瞥した力エル顔の医者——冥土（セラ）帰しは、まるで神に誓うような声色で、訴訟を恐れる普通の医者なら絶対に口にしないようなことを、何の躊躇いもなく宣言した。

「……だが、勿論完治させる。これは絶対だ。僕の医師としての誇りにかけて、彼女は立ち直らせてみせる」

数日がたった。

最中と羊羹、汁粉は、この数日、ほぼずっと小豆の傍で看病を続けていた。流石に最中は政務もあったが、羊羹と汁粉は仕事も休んで付きっ切りの看病をしていた。その無理が祟ったのか、今は羊羹と汁粉も壁に寄りかかったり、ベッドに突っ伏すような形で眠っている。

「……小豆ちゃん」

自分以外の誰も起きていない状況で、最中はいとしい孫娘の頬を撫でながら呟いた。

思えば、彼女と初めて出会った六年前には、こんなに愛おしい存在になっていたなど考えもしなかった。あの時は、自分が甘やかすであろう孫娘に付着したバグ程度にしか思っていなかったこの人格。今となっては、その人格が壊れてしまいかもしれないと思っただけで、胸が張り裂けそうになるくらい苦しい。

ヘウンキャンセラ―

冥土帰しの話によると、今日で丁度全身麻酔が切れ、意識が覚醒するらしかった。もしも、その時彼女の記憶が失われていたり、人

格が著しく崩壊していたら、自分はどうなるだろう？ と最中は思う。………少なくとも、今までの自分ではいられないだろうな、と何となく悟った。それくらいに、最中の中で彼女の存在が大きなものとなっていたのだった。

「………お願いですから、戻ってきてくださいね」

優しく頭を撫でると、最中の指はするりと髪を通っていく。

「………んゆ………」

「………！！ 小豆ちゃん………」

声に反応するように、小豆の目がゆっくりと開かれた。待ち望んだ瞬間を前に、最中は声すら出せずに彼女の拳動を見守る。小豆はきよろきよろと物珍しそうにあたりを見渡した後、限界まで目を見開いている最中を一瞥し、苦笑しながら呟きかけた。

「………知らない天井だね」

05（後書き）

小豆の内面描写はまた次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4236t/>

とある世界の剥離要素（エラーポイント）/外伝

2011年9月11日03時25分発行